

藝
巖
鳥
圖
會

卷之二



嚴島圖會卷之二

目錄

- 本地堂 わんちだう
- 朝座屋清水 あさざやのしみづ
- 黄櫻 きさくら
- 荒胡子社 あうえびは
- 納經堂 なふきやうだう
- 牛王社 うしおうや
- 脇浦 わきうら
- 光明院 くわうみやういん
- 鳥井松岡 とりいのみすか
- 北薬師 きたやくし
- 御笠濱 みかさしほ
- 率堵婆趾 そとらべのあし
- 寶庫 たからぐら
- 金剛院 こんかういん
- 香櫻 かきざくら
- 奉行屋敷 ぶぎやうやしき
- 有浦 あうのうら
- 谷原 やつのはら
- 人麿社 ひとまろや
- 寶光院 ほうくわういん
- 玉御池 たまのみいけ
- 御手洗川 みでわらいがわ
- 鐘樓 かねろう
- 五重塔 ごじゆうのとう
- 龍宮界藏 りゆうぐうのざう
- 元占役所 もとらふやくしよ
- 圓城院 えんじやういん
- 谷薬師堂 ややくしだう
- 中間薬師 なままたまやくし
- 寶壽院 ほうじゆいん
- 鏡池 かがみいけ
- 花園 はなぞの
- 山王社 さんおうや
- 大經堂 だいきやうだう
- 轉法輪藏 てんわふりんざう
- 鐵鳥居 てつのとりい
- 神泉寺 かみせんじ
- 中間谷 なままたま
- 道祖神社 みちのそとじんじや
- 福壽院 ふくじゆいん



廢愛染院 あいのせんいん
新町 しんまち 摺鉢谷 すりばちや
粉場 こなば
二王門 におうもん
角佛堂 かくぶつどう

神力寺 しんりきじ
存光寺 ぞんこうじ
宮尾城壘 みやおしろあし
小浦 こaura
揺岩 ゆいがん

大御堂 おほみたらう
濱役所 はまやくしょ
今伊勢神社 いまいせのじんじや
池浦 いけのうら
西行返 さいぎょうかへ

廢龍翔寺趾 あいのりゅうしょうじ
町會所 まちくわいしょ
休堂 やすみどう
蛭子社 へびこじや

櫻町中納言成範卿書

海と野と空

本地堂 本社 本尊十一面觀音

毎年二月八日より一夏九旬の間極供養此法會ありこれに依て夏堂と
も稱す正月元日供僧の脩正會ありまこと正月五月十月の十八日祝を
講十一月廿二日天台大師講等あり

法笠濱 鳥井の傍ともいふまた本社

法笠濱暮雪 八景の一

浦なみのいろもひとつおわりつも海雪吹みはの濱のまはごぢ 後二位実岑

あうけとや神もみろはの濱雪ふらほのまきくつも海か雪 宣阿

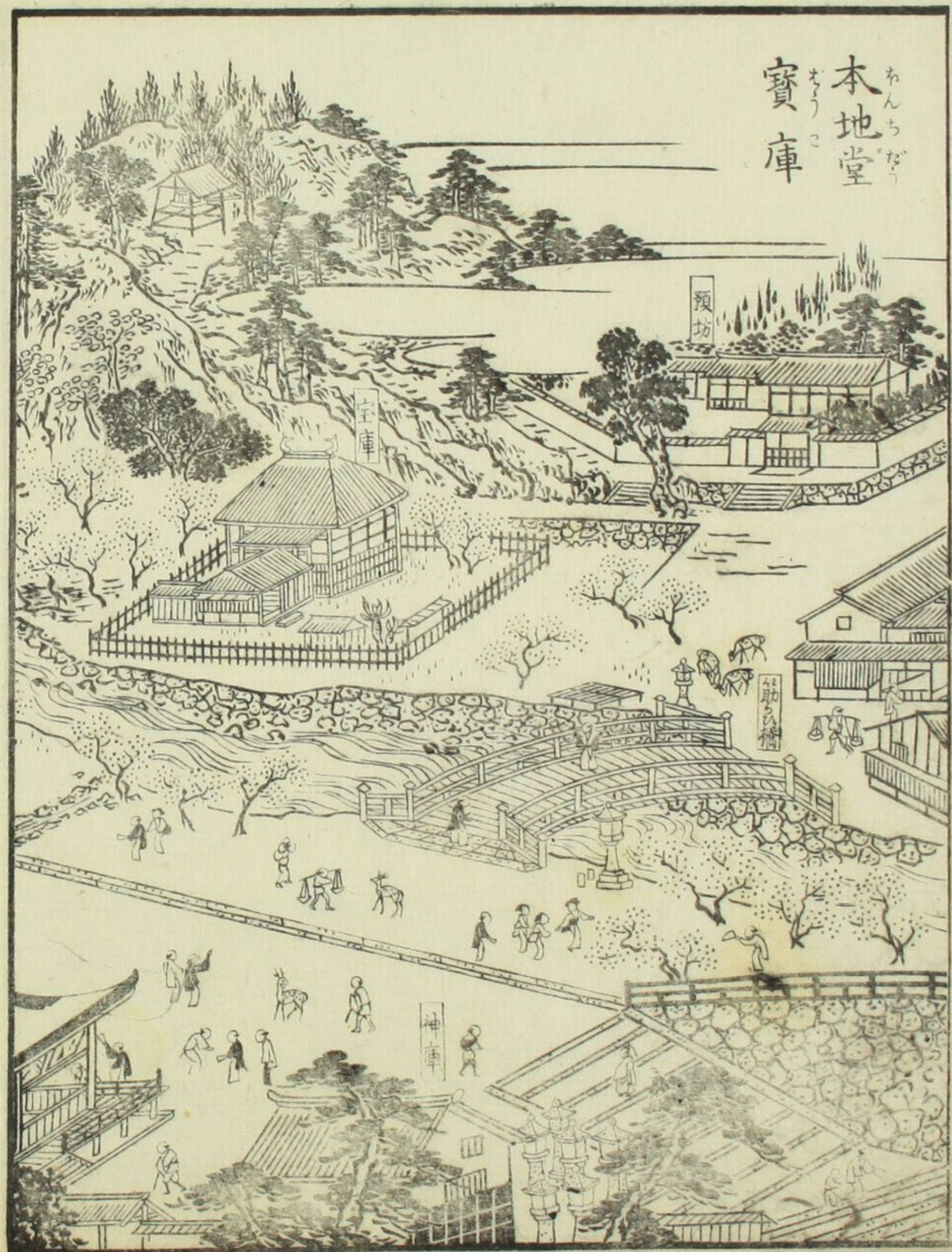
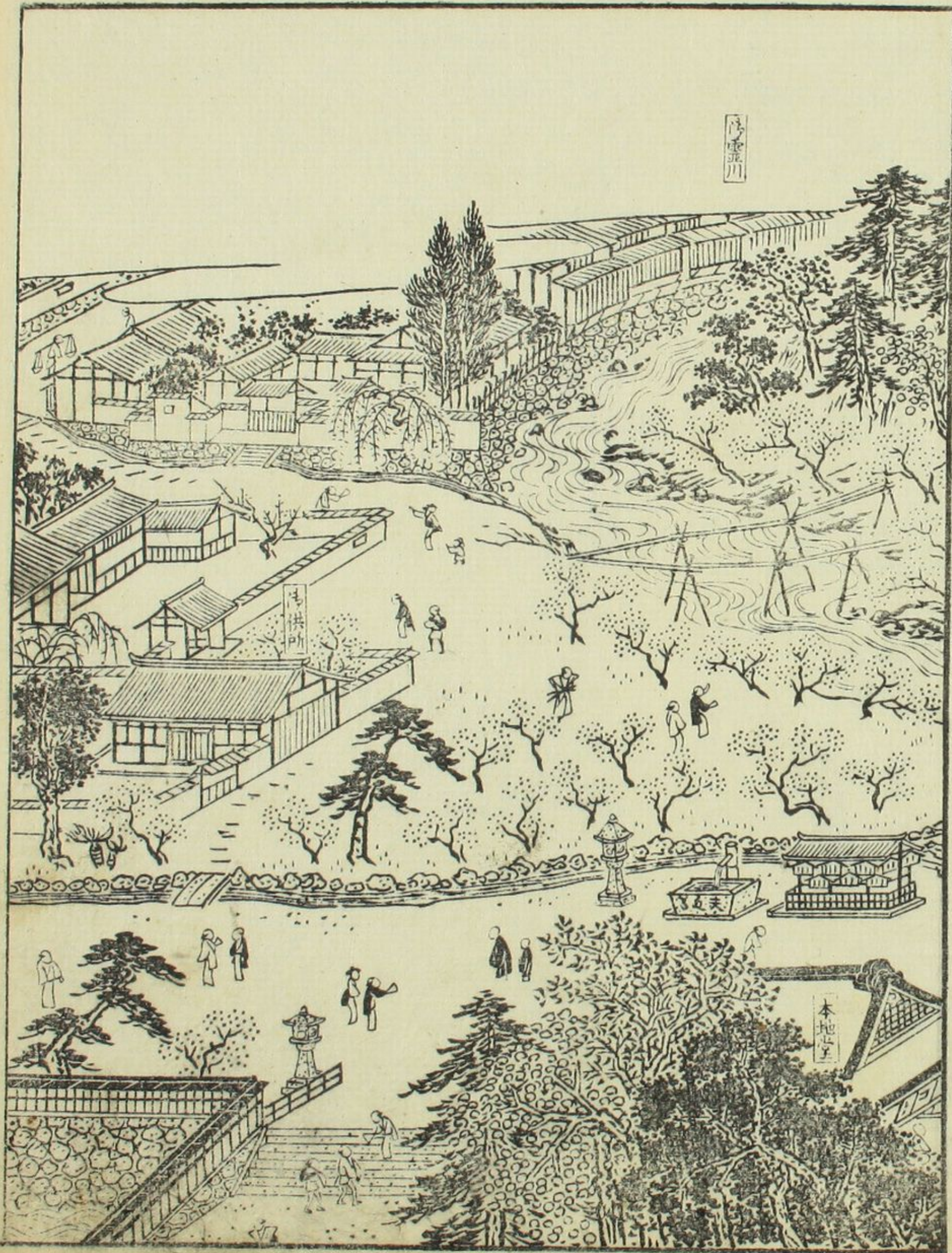
白雪重く御笠濱。平沙十里更清新。夜来 菅原在廉

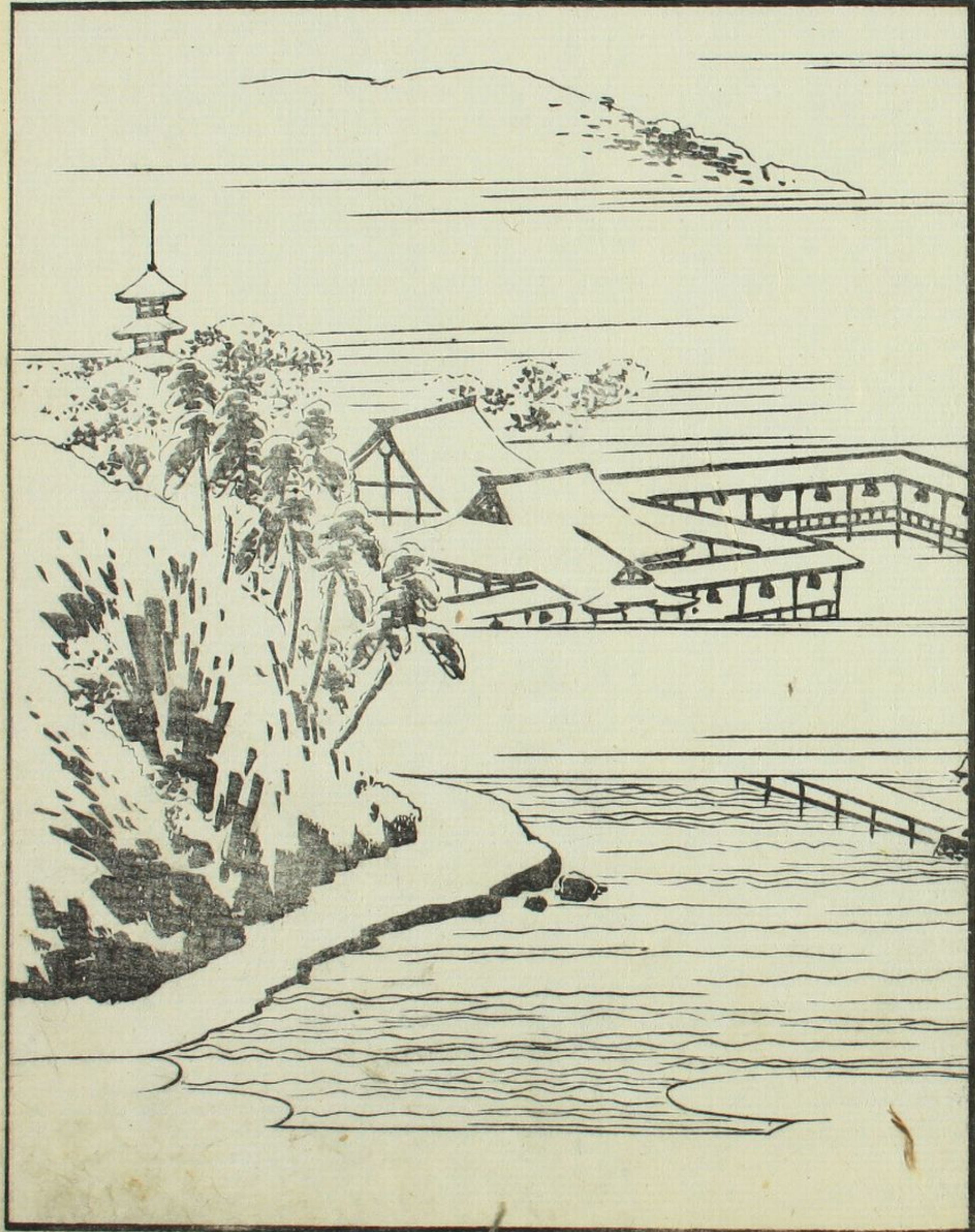
最覺好風色。寒月和光同玉塵。

風糝飛花推笠濱。漢夫轉棹却迷津。雲林

煙塢渾一色。更訝波神撒玉塵。

黄檗百泉





御笠濱暮雪
みうらたまのかせつ

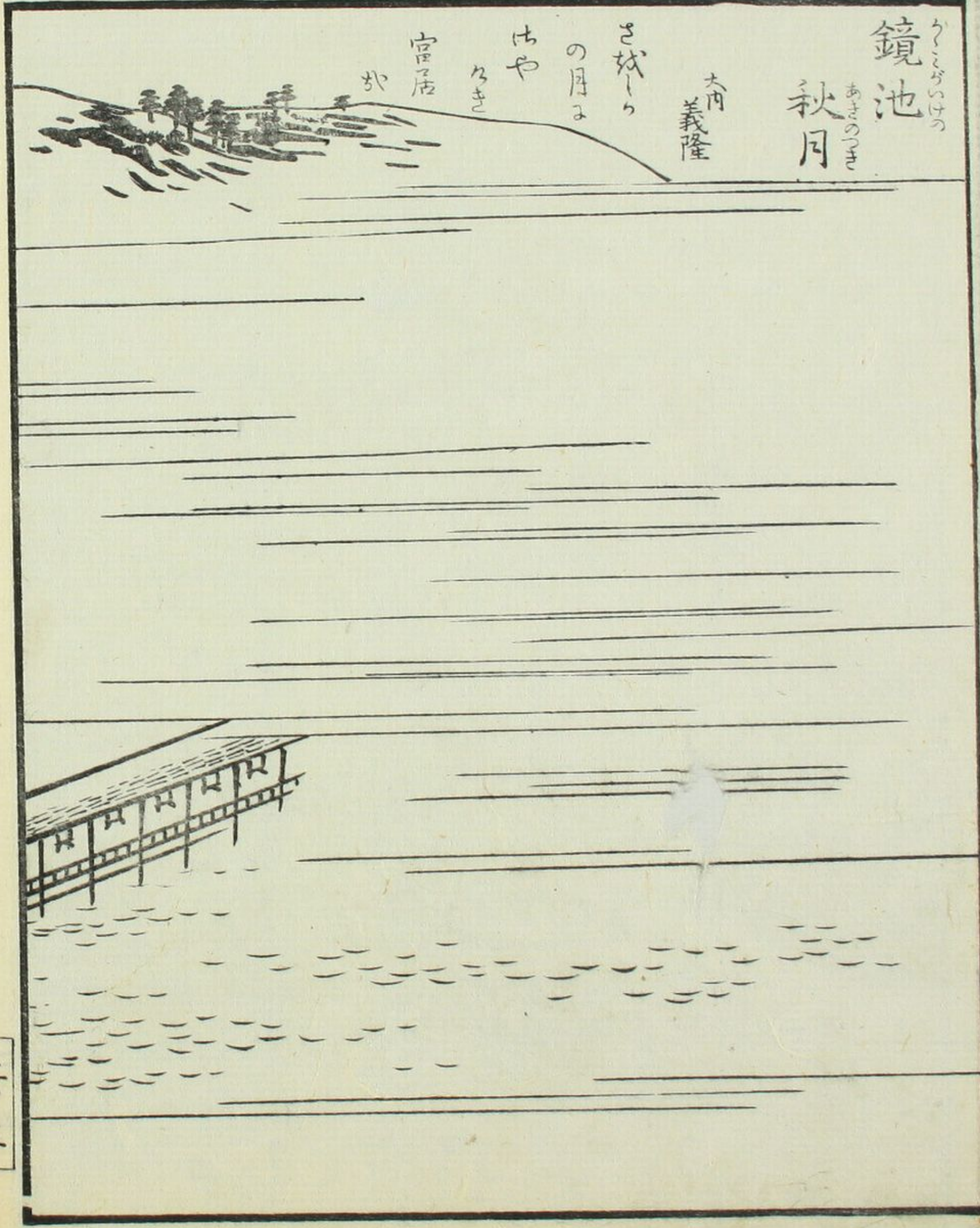


平安
孝文
[Seal]



神姫殿上月輪低
 百八回廊路欲迷
 吟翁不怯蹄珠廻
 前導何時無鹿蹄
 頼吉坪

平安孝敬



鏡池
 秋月
 大内
 義隆

さびし
 の月
 はや
 宮子居
 が

玉御池 すべて大鳥居より神殿のほうにあり
王ハ護美の詞なりとぞ
鏡池 客神社の邊より潮退て深くお祀處ありて別々
一小池をなげが如し秋夜一輪の月光を映まじむ

鏡池秋月 八景の一

やこはらう月もかこみ池の名を足せてや秋のけげみくらん 羽林雅季

みまらららら光も思なれかみの池水次第る月影 宣阿

海門靈跡甲西洲巖島佳名千古悠多少 三位藤原宣通

行人富觀賞瑤池明月鏡池秋

一泓寒碧傍靈祠淨似菱花可鑑眉最是 僧獨麟

清秋明月夜其如漢帝影娥池

清秋月滿鏡容池古殿深沉夜色奇假使 僧瞻雲

蟾宮藏蹟去分明照見玉城姿 山本元貞

山本元貞

静夜垣城月臨照盈々移影来

朝座屋清水

清りの水と

客神社の邊瑞籬乃らあり朝座屋は用ふる所にして隈は汲むこと紙ゆると次朝座
屋ハ神人雜掌の所なりこの水は冷よて曾て秘法を病を愈しむといふ依てまこく

卒堵婆趾

大宮鐘樓の傍あり平判官康頼鬼島よりながせし卒堵婆流寄しとて後たり今石の
燈籠一區を建てその標とせり蓋まつて見るべし或云この石燈蓋ハ康頼歸京の後寄

附せしとて後なり

源平盛衰記曰康頼入道ハ都のこひしはもさるみふて特々七十

有余の母紫野といふ所不在なる城思ひ出ていとせん方なくを於

もひる流されしと紀かくと知せまわしかりしれとも関たまひな

を関焦ぬんこと此痛もく怒しはよかくともいそはしめて下りたき

はね余て今追もれをせむこの形林城さへ関ていふをかりしは歎き

たまはんなどいひつけてた泣より卯のとなし然しその何まり

小かくぞれもひつけらる

さつまが沖の小島にありと祝は告よ八重のしづ風
ねむいをきしはしと誓ひ旅たよもなねにへこひき物を

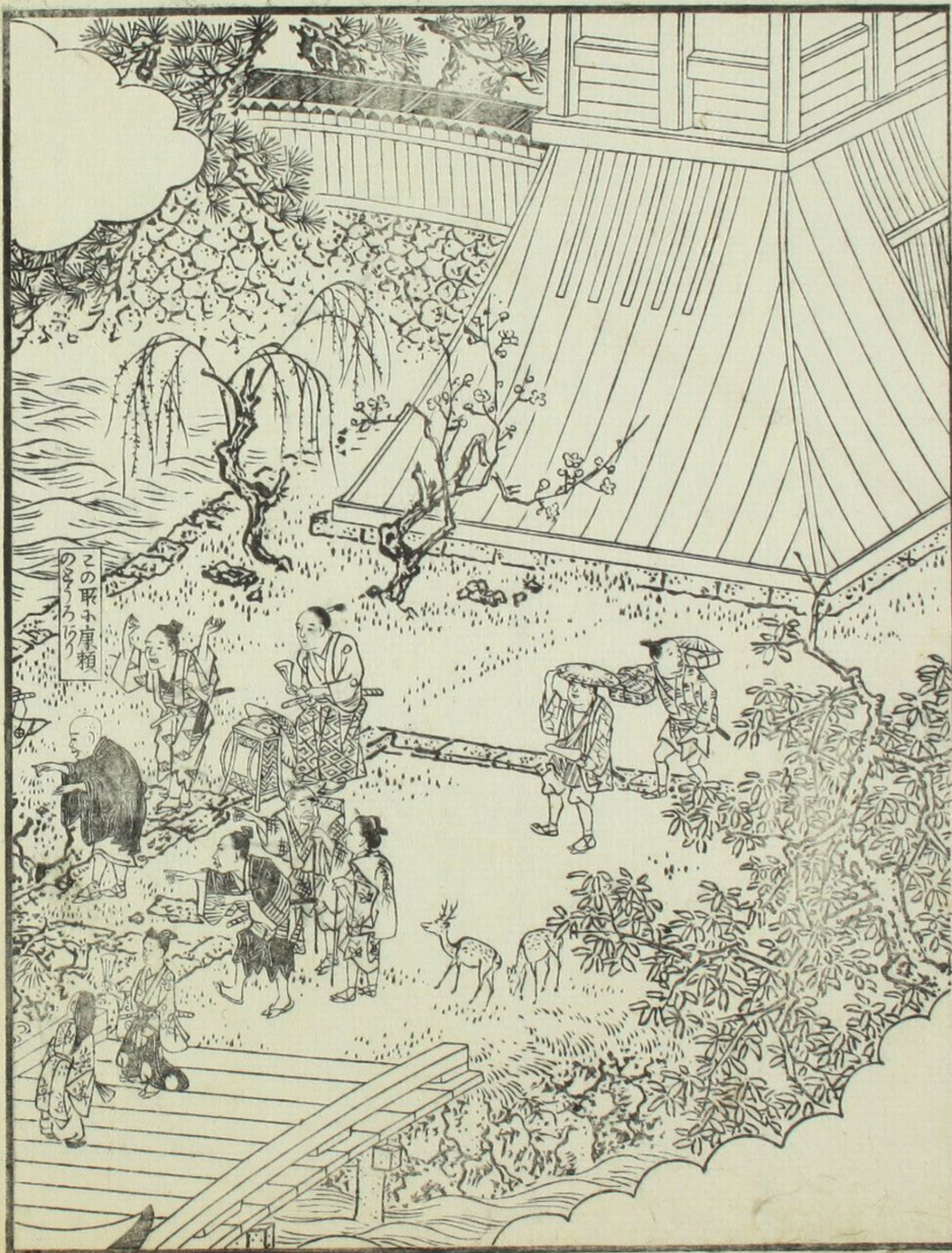
ふ本の率堵婆をつらり願ひき阿字の梵字をまねたもてよ二首に
哥を深免下小廉頼法ゆとかきて文字を彫つ誓ひたる(帰命
頂礼熊野三所権現若王子分て八月吉山王々子眷族惣じて上
梵天帝釈下よ八堅牢地祇ことにき内海外海の龍神八部憐
を垂れたまひて我かき流を言れまうたゞ比風の便波の傳は日本
の地ふつけたまひなつ小ねを次る母よ見せし免たまといのりつ西
風の吹と起ハ八重の波よぞ深免たる行小百行有り國土を治むる
謀善小美を台有り生死を出入る勅有り率堵婆ハ萬善の隨一諸
佛これに歡喜し孝養ハ百行の最長龍天うたゞ次哀懸次漫く
たる海上波路もこの波のうらなうたゞ次といねもいねどせ免てハ

母のうなはふかくしてこねの祈り思ふねもひと風とたり願ふねがひ
も答へて龍神納受た垂れたまひ彩雲の深小率堵婆一本寄たる
次浦人これを見外て熊野公弟小奉りつ礼も世に思まざるや披
露いな一安養の巖島小一本着たりたり折良廉頼入る縁たる
僧判官西海の波よなははき好と守り礼を何となく都をばらくと出
て西園の方へ修行しけるが便船あはばのへはもろくはふとれ
もひりきと舟ねろけよてハ船も人もかよはばねのぶる商人をた渡
るも僅かに日和待得てこね行なとゆきまといふにも尋行べきそ
ちもせ次有る礼も漸く安養園までい下り小り巖島明神身
參詣して西三日有る抑當社乃景氣を拜を礼を返り翠
嶺山高くと吹風効験の高きこと紙示し前よハ巨海水深くと
波瀾弘た深たこと紙表を潮水社廊を浸すと起ハ緋瑠璃を瑞

康頼率堵
婆の圖

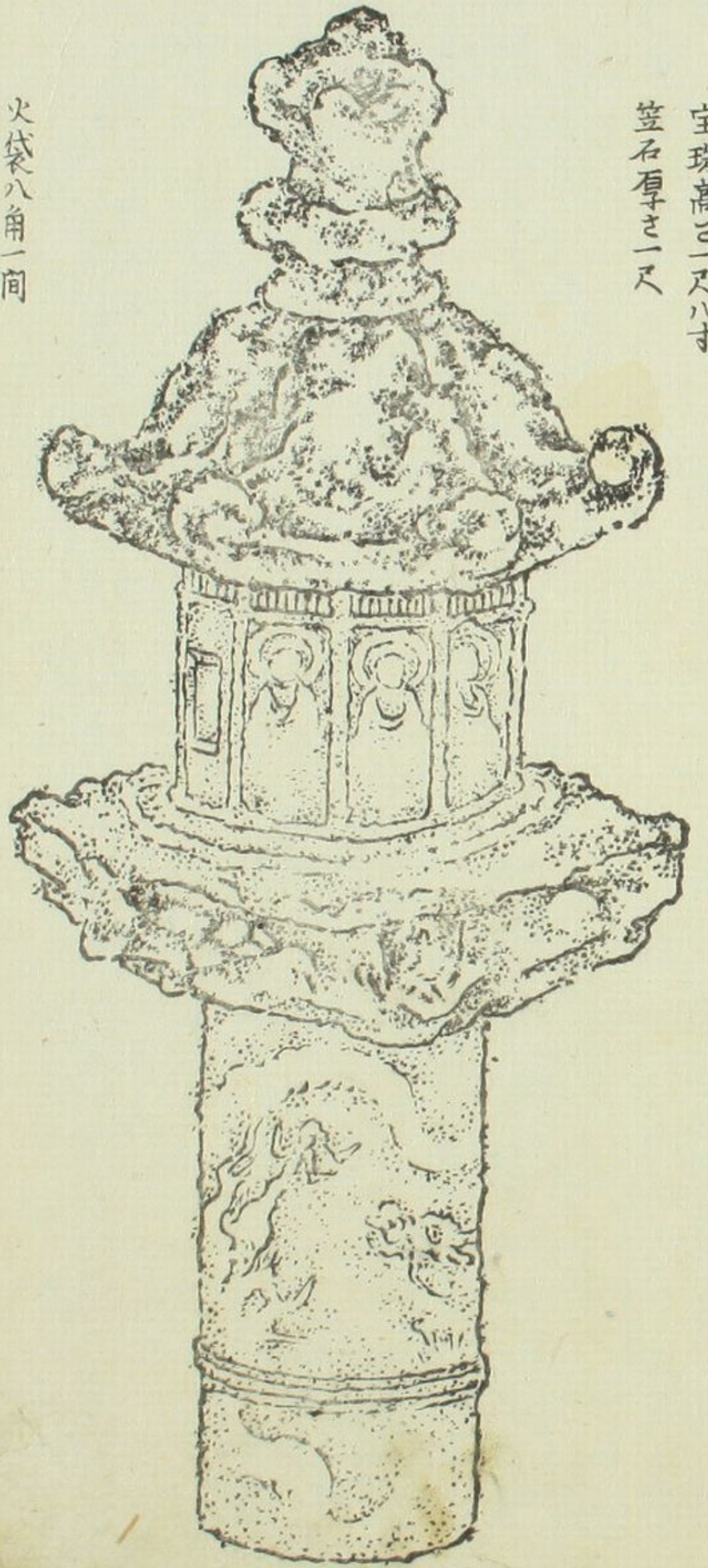
率堵婆は流れより
—とこの後の本文に載たる平家物語に
嚴島大明神の寺前のなだすと見えれ
るおよそいこはありなるべし石燈籠一
基が跡の標と建たりその燈籠の面は下
に載たる如きなり

鐘樓は内義隆
に寄附の鐘と云はれり
その鐘下不載たりか
きハ率堵婆の流せよ
り世ハこの鐘樓は
くりなるとはれど其取
とせらに知りめん
うたれに番



籬小敷と疑も引治神前を去ると紀合浦の玉を庭上小蔭り
 とくふしまる和光月磨の利益何きもとりくありといども海
 畔の鱗小突を造ひ多ふん周縁誠は知ごし奉請合掌の我
 まても八相成道の結縁いたのくくをねもいさく此明神をい
 平相因深く崇敬したまふりぞかしく思ひいづるも恐ろし幣と
 りら努りなきは只法施をぞ奉りける心中小祈念ゆるは歸余頂
 礼和光垂跡の當社明神硫黄島の流人康頼が生死知し免多しな
 も存命あを夜の守晝此守となり終て波の便を聞し米再び
 故心のを小うしたましと祈るるを哀なき終日念誦したりる晚
 どの神人神子浄前の諸遊後月の出汐の満るに替ははると
 なく波は流る藻屑の中中卒堵婆此一本見え来る怪しやい
 なるりかしく取上見えは二首の哥をかき其下小康頼法師とぞ

平判官康頼寄附燈籠の圖



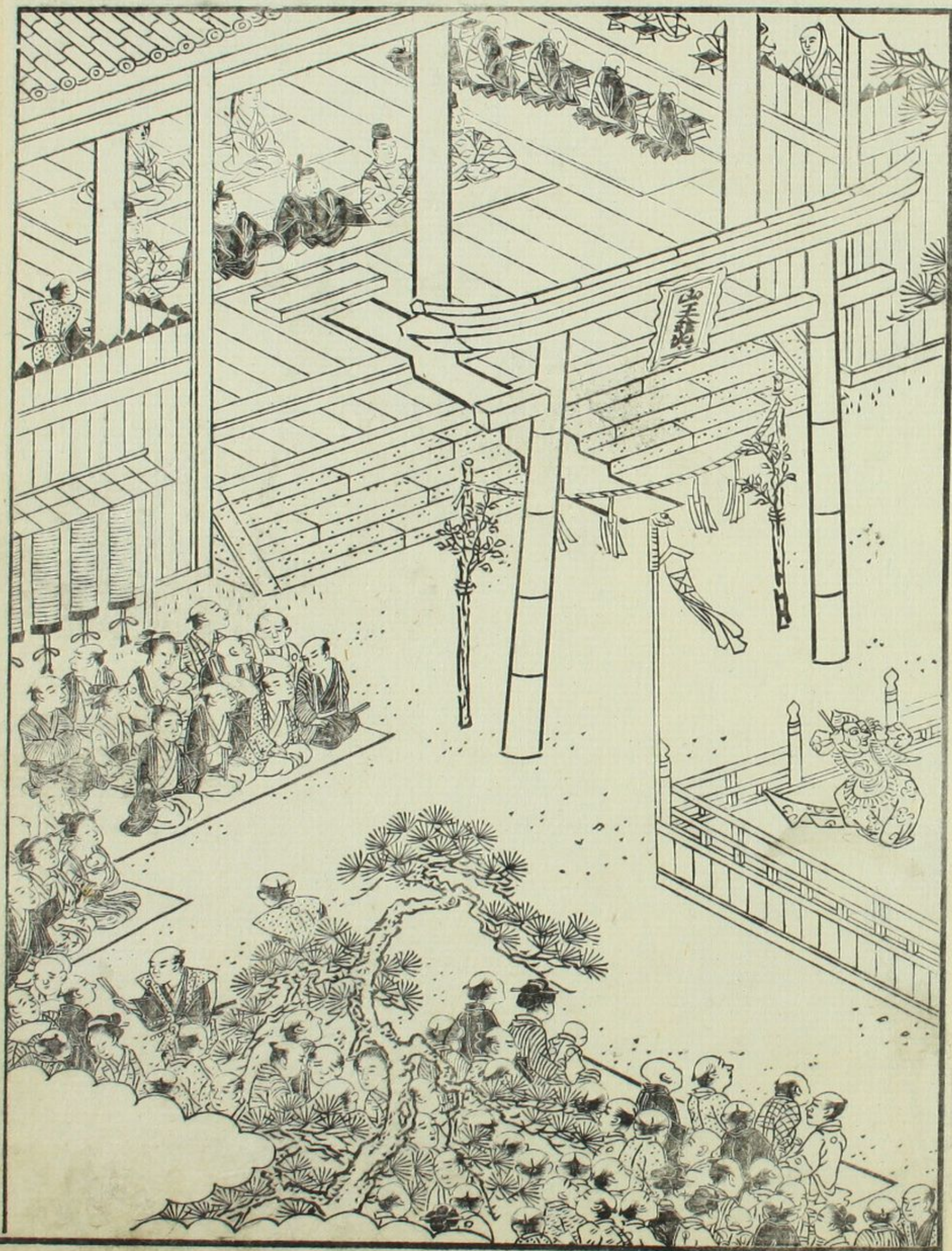
火袋八角一間
 五寸五分宛より廻り
 四尺四寸長一尺四寸五分
 火受六角一間一尺三寸宛より
 廻り七尺八寸厚さ六寸五分

地上より宝珠まで高さ八尺四寸臺
 石うつもれて見え候

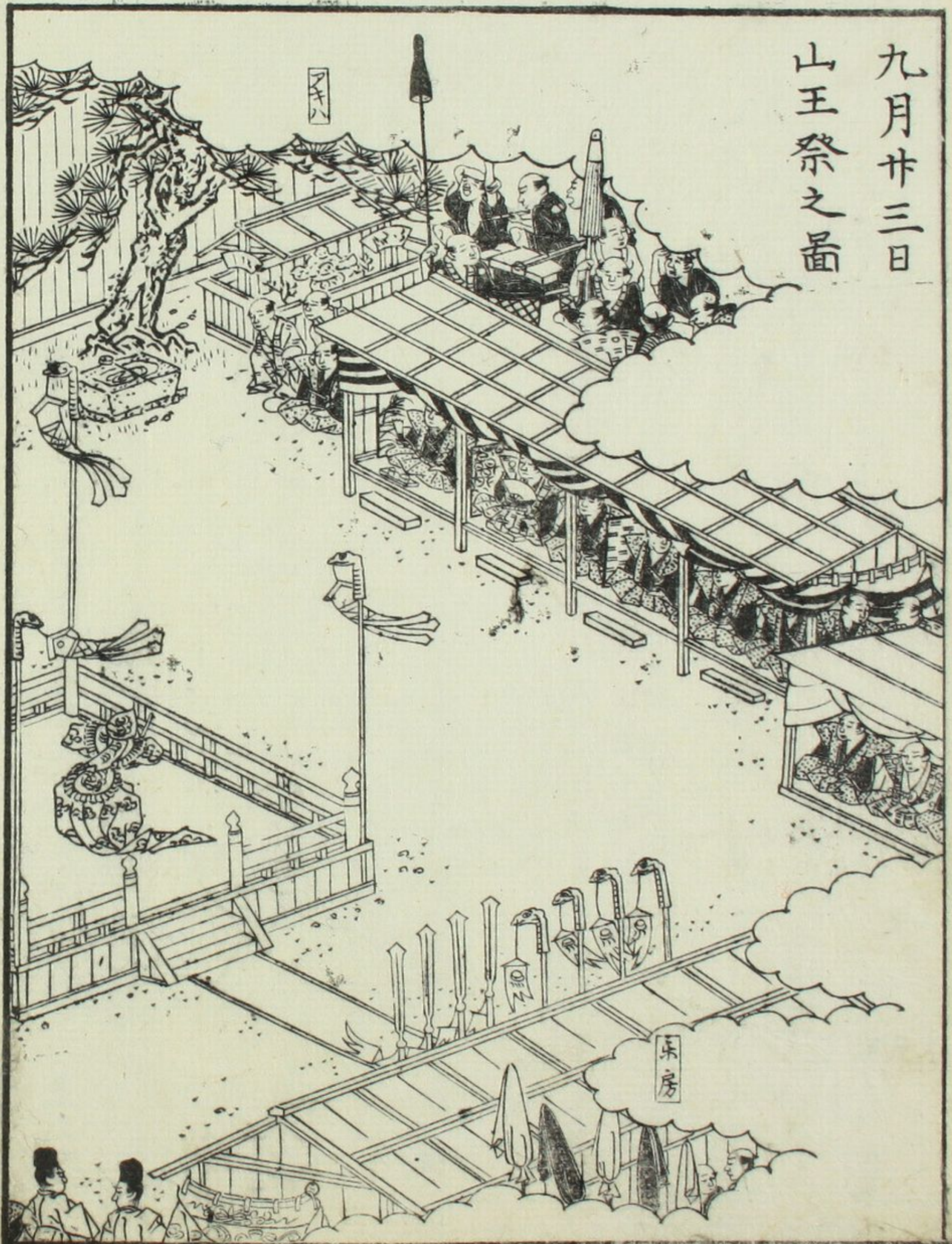
軸廻り四尺長さ三尺
 五寸

書付たる各々にこれを取流し一哥を後し哀なる事なり作者何
人やらんといひる中社僧の有りるがいと好しれりこれいひ
とせ都より薩摩源硫黄が一人の流人有りた法勝寺の修
行依寛丹波少将成恒平判官康頼なりこの康頼法師が故に
こひく恩愛の親も悲しくてかく書てながせしにこれをか
ゆりも有りともせしけ是れを情なく捨てやれくべき都の妻子も
はこれこひりなるともふて行末まかまわしかき米これの如何
して故にこひくべきとせいひあひるゆり此僧も見ゆり人も
元海もこおきてりれくかなしけり中社も是れ明神の法計
よやと辱く貴くせ思ひる社僧この僧をかきひりけるやく修行
者の法坊も一都上社もこれ平堵婆の有りしは人慥に
平判官康頼が妻子のもと傳へたまひなんやとて僧とてい

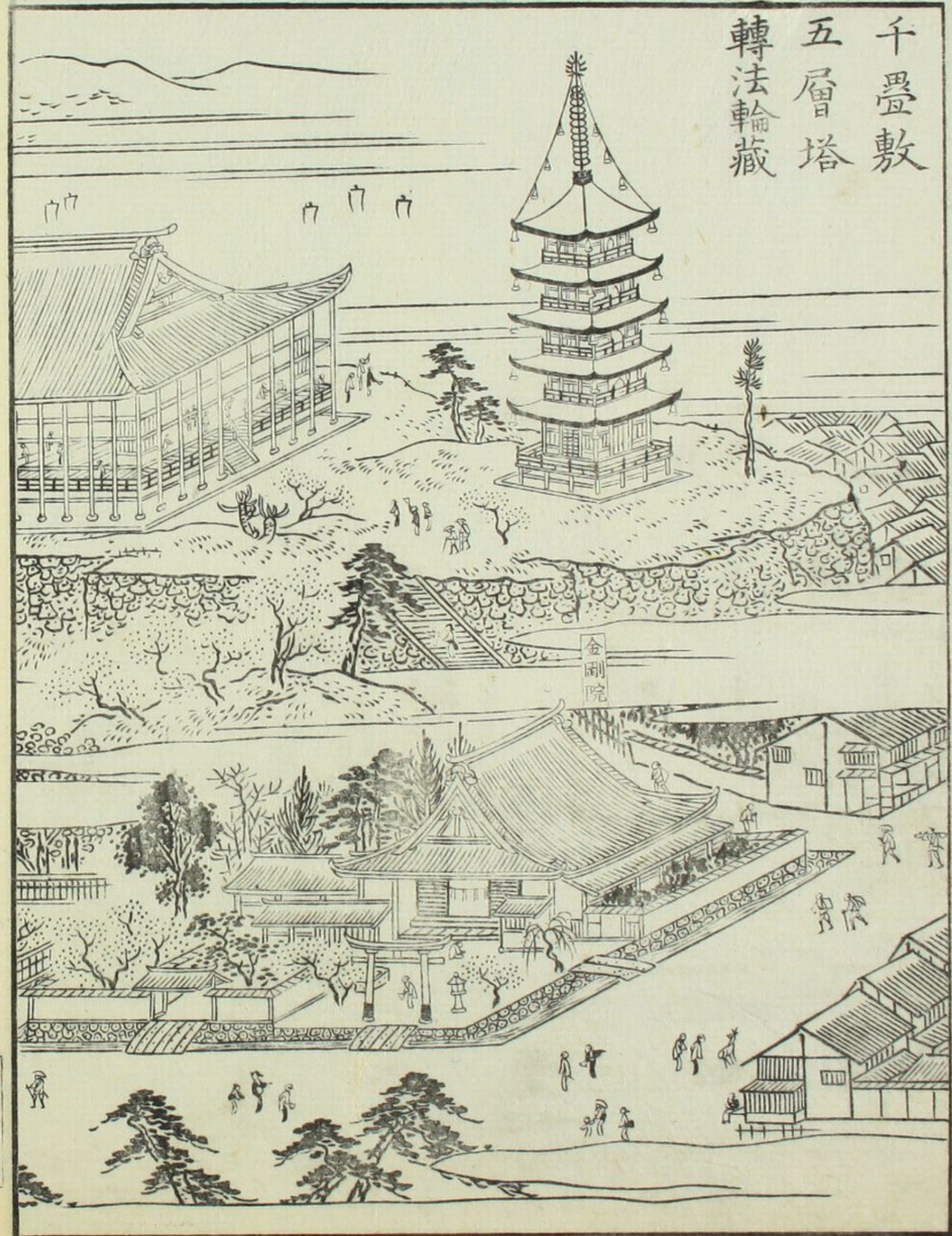
もけりうけたまはるに世も哀まなる事なり此修行者のた
ひ宿はごまぬるなれどももと都の者にて侍りしが折節都へ帰
のほり侍り康頼がゆりわたりてれをたしに傳へたるべし
且明神も法照使たるべしとて件の平堵婆を請とりて後此
痛小狭と泣く都へのほりにたり康頼の平堵婆小詞をかき名を記し
文字を彫刻しそれ小墨を入たき法坊も波も記えしと鮮りに
こせえたりとれ
○平家物語曰康頼入道へはまりに故にこひくをまにせえてのまかり
ことよや子本の平堵婆をつり年号月日家名實名二首の哥はそ
かまらるる中累是城浦もついで南無帰命頂礼梵天帝教日大天
王堅守地神王城の鎮守諸大明神別して熊野権現安産のつ
くしまれ大明神せえて一本なり共都へてこたててねま



九月廿三日
山王祭之晝



楽房





是ハ近年天台僧密成高麗藏の破壊
 せよと云ふ都建仁寺よみて其を補ひ
 たる時白雀来り巢の禎祥あり今ハその
 趣を画せしむる

嚴島輪藏經有關密成法師

今京勉補其闕云有白爵之

祥見索予詩賦此塞責

曾觀嚴島貝葉闕魚蠹殘壞頗狼藉
 就裡可惜高麗版散佚不存六百策
 司書神鬼何其情愛字佛陀亦盡惜
 一朝補足是誰力仙靈呈祥生白爵
 鄭巢亦豈不思功為裁一篇送省空
 佗日相攜遊嚴島玉篋生輝舊輪藏
 唐僧省空補壞經事
 見鄭巢送省空詩

賴杏坪

平一匣



らなみ乃よせていさ(ま)度毎小卒堵婆(海)ぞうか(る)そと(は)こ
つり出(は)ま(は)ひて海(の)い(ま)り(れ)を(目)め(つ)も(は)を(卒)堵(婆)の(う)次(も)つ
もり(り)り(せ)の(物)思(ふ)を(便)の(風)も(な)り(たり)らん(ま)と(神)明(佛)陀
と(や)お(ろ)せ(ま)ひ(たり)らん(ま)の(中)の(一)本(安)樂(の)く(よ)い(つ)ま
乃(大)明(神)の(清)前(の)渚(の)ち(り)げ(り)に(康)頼(入)さ(が)は(縁)あ
り(る)僧(の)も(一)然(る)ま(き)使(も)あ(る)む(ら)此(島)に(た)り(て)その(ゆ)く(と)も
た(つ)祇(ん)と(と)西(國)修(行)未(出)たり(る)が(ま)ら(農)島(つ)ぎ(る)わ(け)る(中)界
は(僧)い(よ)く(尊)く(思)ひ(静)に(法)施(ま)あ(る)を(居)たり(る)が(や)う(く
日(れ)丹(は)い(て)汐(の)ち(ま)る(に)沖(より)そ(は)と(ち)く(ゆ)れ(し)や
くる(藤)屑(の)中(の)小(卒)堵(婆)の(か)ち(の)足(る)を(何)と(な)う(こ)れ(を
取(て)足(る)ま(む)薩(摩)の(沖)の(ゆ)ま(に)に(れ)あ(り)と(か)ま(た)が(せ)る(言)の(そ
なり)も(づ)を(い)る(い)き(刻)み(つ)る(う)ら(ま)を(は)ま(も)あ(り)い(ま)次(あ)げ(く

と(と)ろ(れ)見(て)た(う)り(れ)下(界)

御手洗川

本地堂の前より源の紅葉谷なり一は清靈川といふ西行撰集抄に東の乃小洗きな
がれありみ(と)い(と)り(と)あり(これ)を(昔)は(水)を(神)供(用)ひ(を)今(の)人(家)
水(の)櫛(を)建(た)ふ(た)ま(ふ)
穢(を)い(て)用(ひ)ま(す)

花園

御手洗の流の傍より西廻廊の
邊(ま)ま(と)い(ふ)花(の)本(ま)つ(り)

寶庫

御手洗川の邊にあり本殿の神庫より古代より奉納せし所の靈物を藏たり
刀(鎌)書(畫)金(玉)仏(像)經(卷)樂(器)の(類)の(庫)中(の)元(元)一(筆)小(筆)二(次)へ(う)次(別)の(宝)物(箇)會(小
詳(悉)せ(り)其(庫)の(つ)り(ま)本(を)く(ま)け(て)壁(に)て(土)を(用)ひ(ま)す(人)文

鐘樓

同西の山上あり社役相箇の鐘あり
ま(と)其(中)の(報)更(不)用(ふ)

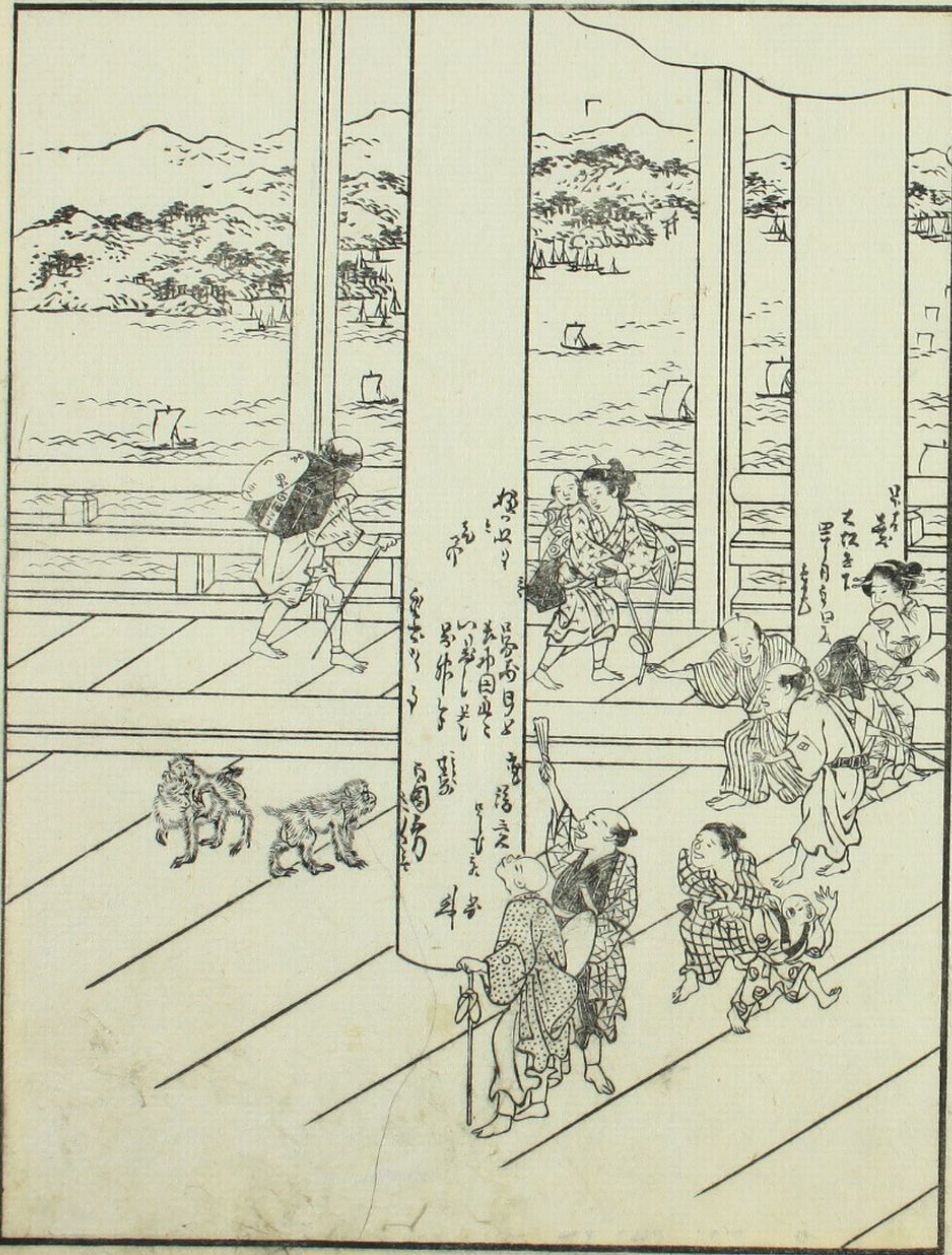
山王社

本社東坂本より
例(祭)二(月)酉(日) 此(日)上(に)祝(師)の(家)而(禰)守(出)仕(神)舞(あり)

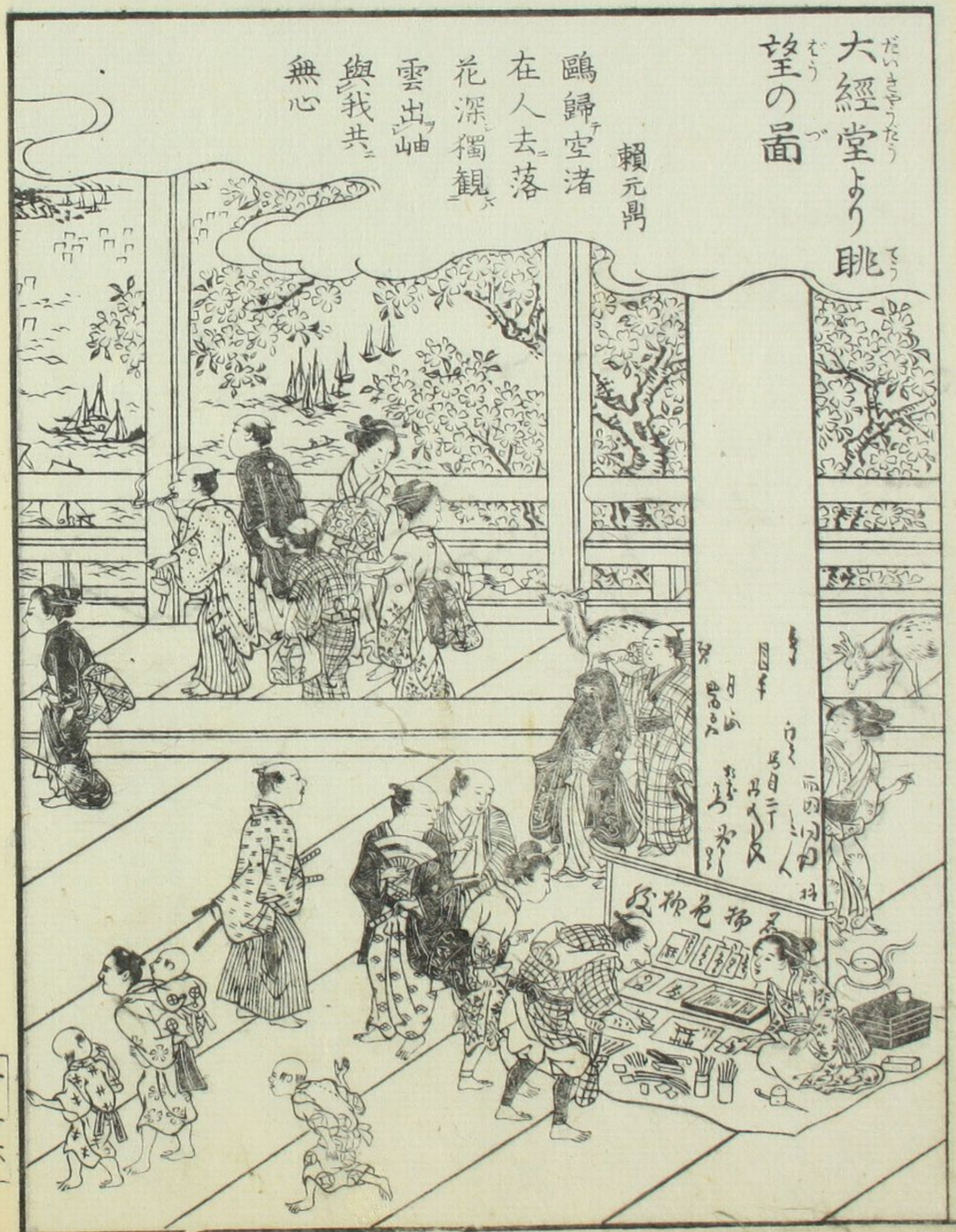
荒胡子社

山王社の大経堂の林より瑞垣を居り
社(か)け(た)じ(を)今(の)金(剛)院(に)か(え)り

似雲



大經堂より眺
 望の面
 頼元鼎
 鷗歸空渚
 在人去落
 花深獨觀
 雲出岫
 與我共
 無心



大經堂より眺
 望の面

頼元鼎
 鷗歸空渚
 在人去落
 花深獨觀
 雲出岫
 與我共
 無心

金剛院 大願寺の子院トシテ

五層塔 大宮の右の方岡上ニ建たり方二間半 本尊釈迦如来 服士普賢文珠両菩薩

應永十四年丁亥七月建立といへり是と母何某の所建也や詳ならず

天文二年癸巳至て年曆爰小二百二十餘年殆類壞又たよぼんと

せし人々是を歎きて再造せしむば壯觀旧小復し今小五層高

く聳へ遠望はると紀多々宛然とて鸞鳳の霞際小翔るに似たり

九輪再興の時の銘露盤小有り南のひらふ天文二年癸巳三月十七日

上野前司若系貞茂前掃部頭若系廣就大願寺道本西のひらに

大願寺沙弥衆交祐尊海宗歡儻阿東の側小全宗五十貫井尻範

前井戸彈正又左衛門治部小のひらに鑄物師大工壹岐同女房小工次

郎三郎平子十二人と有り中々磨滅して讀むと如きも有りて詳ら

小はること能はざ

大經堂 桁二十間梁十間五天余椽幅八尺に方欄干をつけ

傳及のふ佳古け地小椽樟の大樹有りるる圍抱義をくつふ事也

一々其高々枝葉の繁茂せるまこと洞小ねよぶくも阿らびこの

故小天の月影を障へ翳して朝日大野の地方を掩ひ暮小きた

く彌嶺を起えて能くたさびの島小影せり然るに閑白殿下秀

吉公一々勢火此筑紫へ涉進発有りるると紀涉船をこの島小よせ

たまひ深く明神の冥助を涉禱ありて涉凱旋の折々け本邦

伐せその跡小經堂を創建したまへり是併涉願圓滿の涉験と

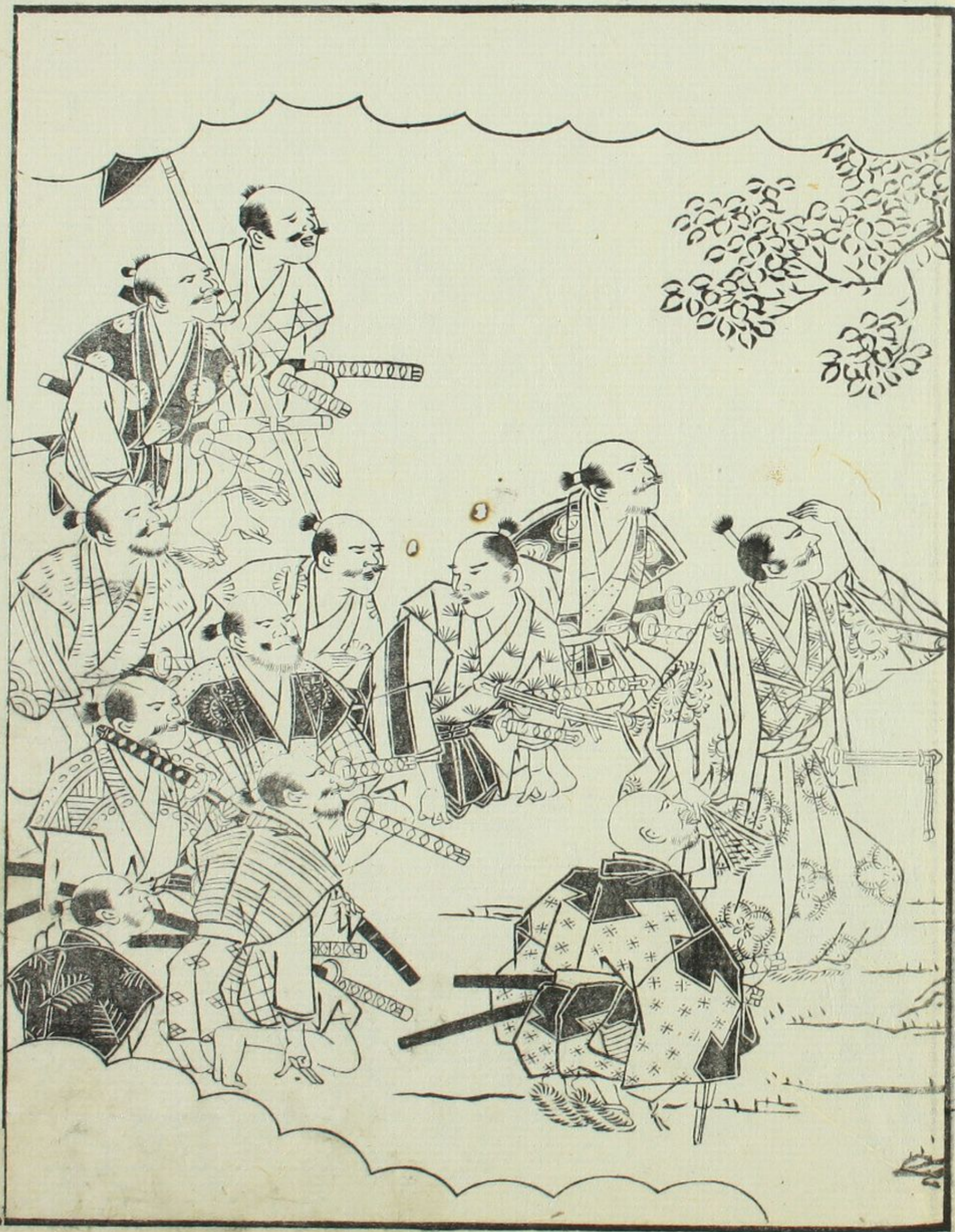
ぞ聞えし借りの伐せたまひ一々大木を以て促らして免たまひし

以て母名高々安宅丸の涉船ありかく他材を交へざして全舟成

就小及ふのるななその餘材を經堂創建の料小足したまはる

本尊釈迦如来 作詳ら 昭士阿

難迦葉 摩伽他



東原 彰 刻

大經の堂だいけいの由ゆ來らい



真虎

是をもて彼本の大なるもまこと知べしかくて經堂落成の日わりのぬまば一切經の誦讀ありて供養の式度重なり丸とをひ傳へる周わりの安宅丸の希有の大船なりこの既小諸籍小著一は廣島の船番に楠木一株をもて大船一艘をつくれよとてたのゆゑなり

○經堂建立の時安國寺惠瓊より大願寺へわくる書翰

當島一建立後 関白様江作出り爰許沙見廻り
宝塔并に經堂沙立り一月二つ度子部經に續誦
有に夜由り則壹万石急度で有沙渡り由 沙旋
ふたりの申談てお調島中へもけ由り江作渡り恐
く傳言

正十五年三月十八日

大願寺 沙同宿中

安國寺 惠瓊

傳へる大經堂の柱小塙團右衛門直之のさありが經年度々の經營の今其柱かくれては
その經堂建立の時に自ら願せしところなりと云

またこんと後にもえこやいひわうしん小うちふ令ちる稱は 直之

題經堂柱

石川丈山

一島周廻唯七里層峯蒼鬱勢峽然衆人浴澡

長濱水群女徘徊小浦邊塔傍山堂高聳漢寺

棲林壑薄籠烟飛樓湧殿連江曲無數神燈照

容船

納經堂 大經堂の傍小あり萬部

香櫻 同岸上あり張生の頃清香馥郁

龍宮思藏 大經堂の傍小あり二丈五尺方の輪藏にして一切經を貯えたり

轉法輪藏 龍宮藏小あり額

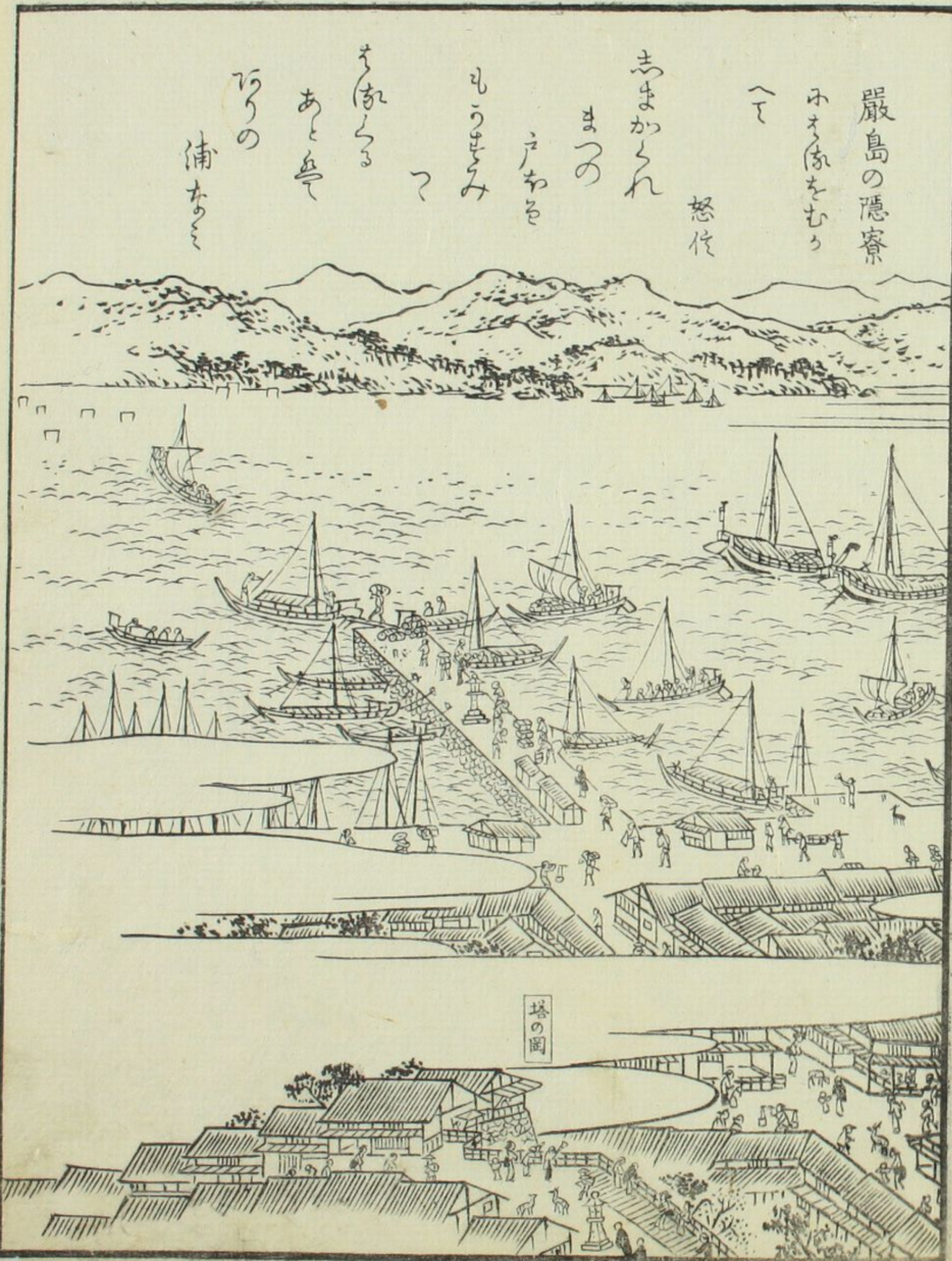
二所の輪藏ハ天文五年大願寺道奉上人往昔この島小納むるところ
の一切經をやくも虫鼠小毀傷せし礼殘編全加はるること知ら

一みて憤然として是邦異域未むる志ありは、其自身後小
たること、因果さば因て大内義隆小請ひ内僧尊海を以て義隆
乃書封齎らして、これを朝鮮小來しむるに、彼土も衰乱既小久
しく佛乘散失して其遺帙た小ほごうちりりくば、徒小ほ城
空しくして帰朝せり然るに天文十一年長門國普光王寺小もと
より納免たりし、小義隆経藏を、小引て寄附せられ、今乃
轉法輪これなり一高麗 龍宮藏の、何年また誰人の取建
や詳ならず、次里老の口傳小龍宮藏をふる、と次を、かの虫ちゅう扇り
毀傷せるといふ、これ龍宮藏の、やとねも、今知さま、きんぎょ経
卷一の宋板一の朝鮮板なり

○尊海渡海の時大内義隆疏勸合の写

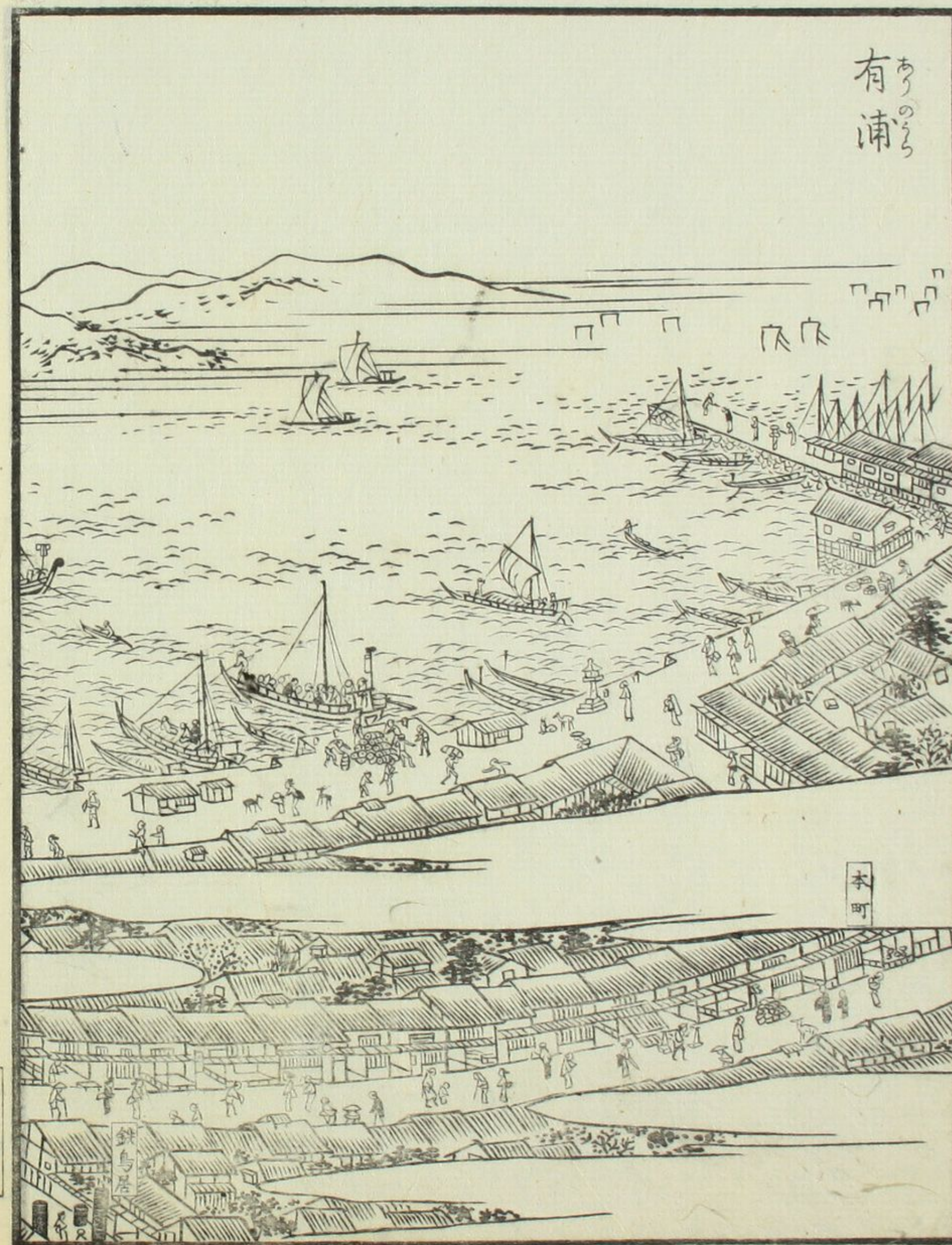
大日本國臣左京兆尹兼都督長史武衛次將多々良朝

臣義隆奉書朝鮮國禮曹參 足下共聞殿下德兼三
代惠懷萬方君道有仁臣道有忠國富化旺文官以才武
官以勇境靜民安王政之盛莫過於今聖治之興何愧于
古抑去天文三年之春、艦船以不腆之土、且矣、彼船及于
今不歸國也。只怪着岸上陸而獻方物否。却沒溺なほ洋海之
風波否。且待回報耳。越又吾本邦之内。有州曰安藝。有社
安辨才多門。兩天為社主。而年代深遠也。夫大藏經。載道
之器。而含萬理矣。運轉之。則全覆燾。繞旋之。則保國家。安
恭加之。古人以孔子比釋子。以十哲弟子比十大弟子。然
則儒釋一致。不可外焉。吾 日域之神社佛宇。無大無
小。以安置此經。為善道也。當社亦雖寄置之。或有蠹虫破
費。或有雀鼠侵耗。有蒸潤者。有殘斷壹函亦不敢全。仍不



嚴島の隠寮
 小舟隊をむろ
 へて
 怒佐
 志まかうれ
 まの
 戸わさ
 もつせみ
 ？
 さお
 あと
 ちの
 浦の

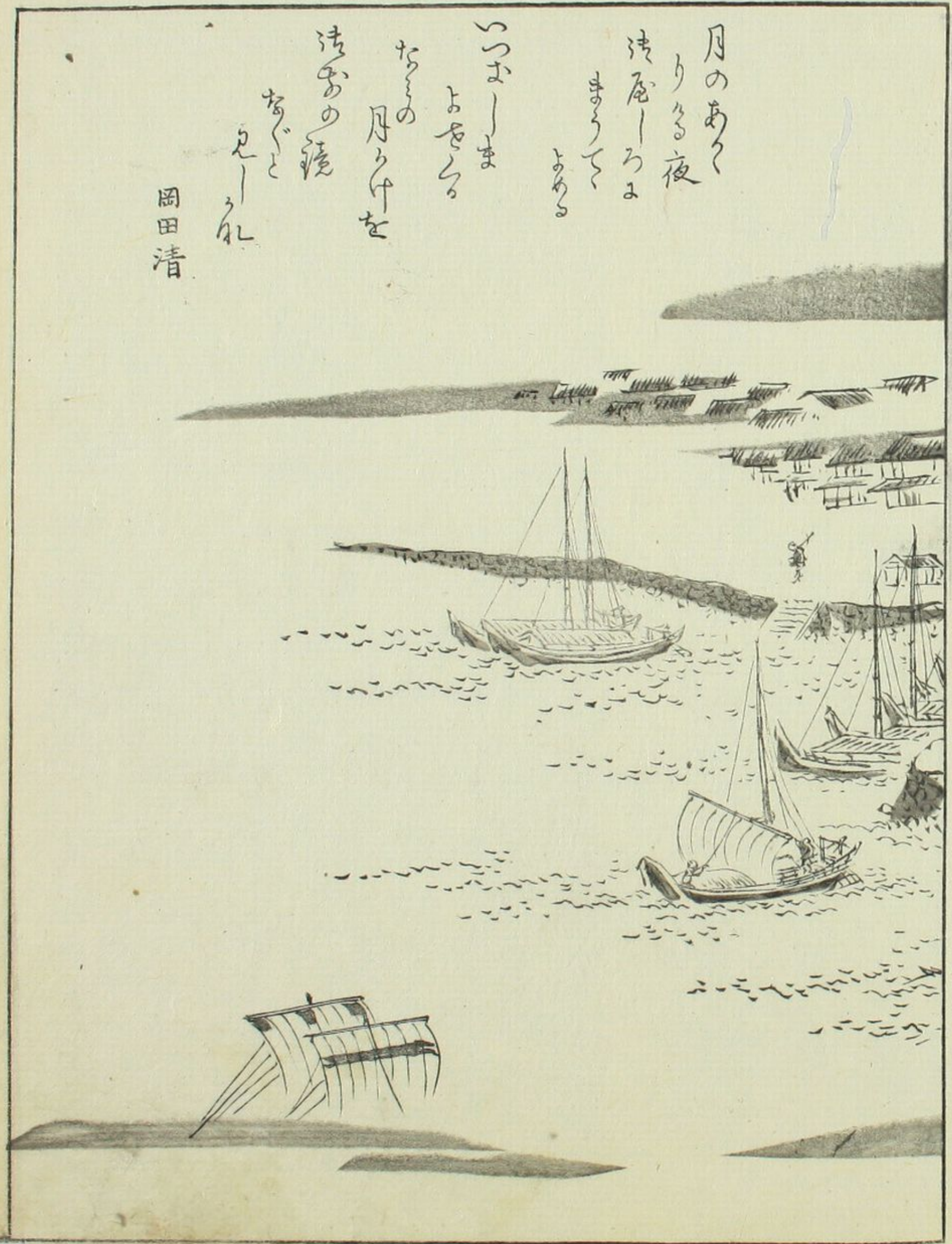
塔の圖



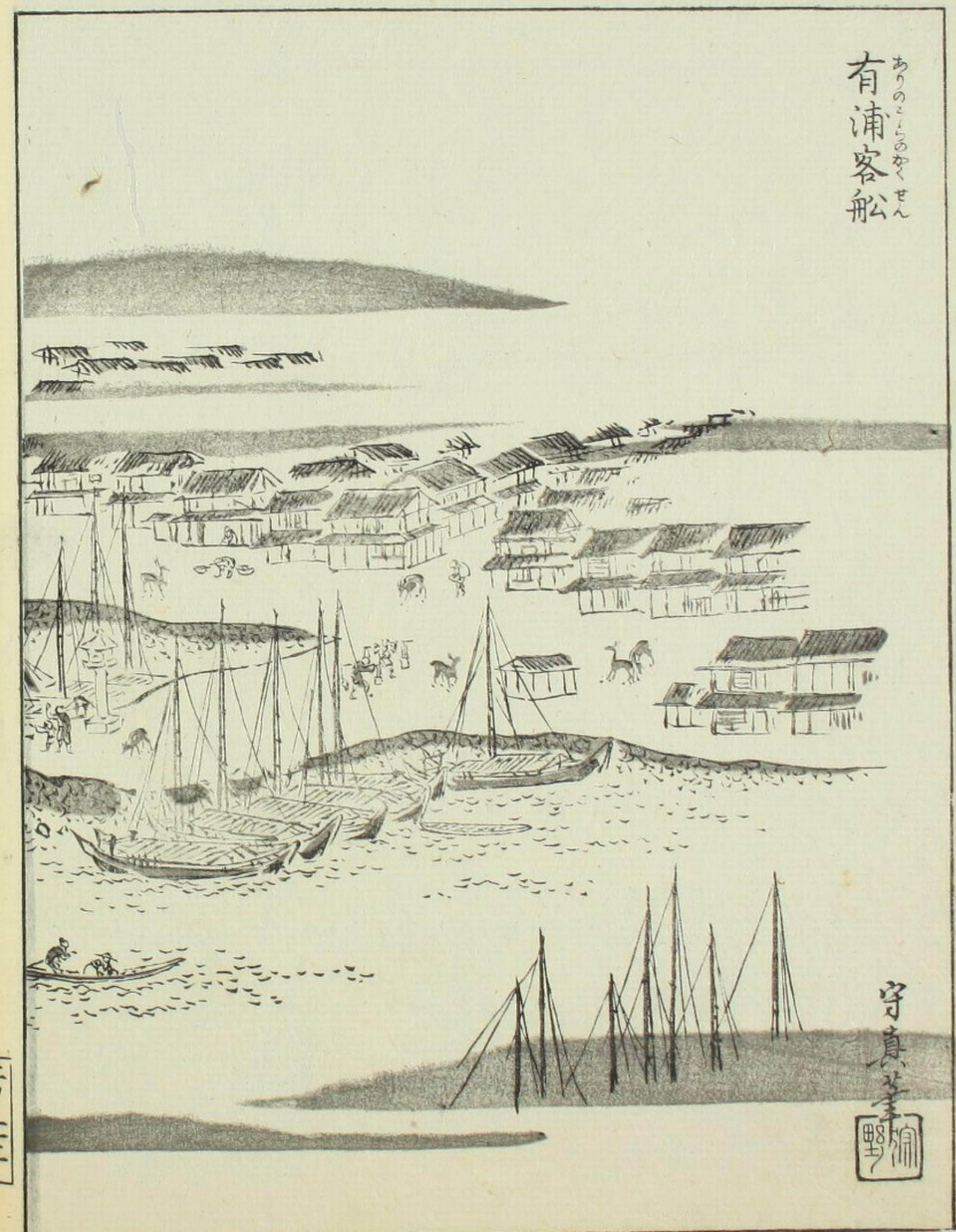
有浦

本町

三十一



月のあつ
り多夜
清庵一ろよ
まうて
よめる
つよーま
よせろ
ちの
月のけを
法衣の鏡
ちと
見一れ
岡田清



ありのこしのかくせん
有浦客船

守真筆
印

三七三

克補完粘終者年既久矣。仰冀殿下頒賜大藏金文壹藏。付回使載歸。則以為億兆無疆之賜。專祝聖壽萬歲。更祈社稷千載。聊獻菲薄之方物。具于別幅。天覽電矚。萬幸。伏乞采納。温風發榮。君時珍重。不宜。

天文五年二月

大内多々良義隆

同返翰

朝鮮國曹判姜頭奉復日本國王臣左京兆兼都督長史武衛次將多々良朝臣義隆足下。美辱書憑。審多福。不勝欣慰。所獻禮物啓了。土宜白細綿捌匹。白茶布捌匹。黑細麻布捌匹。帛皮一張。豹皮一張。白人參二斤。清蜜三斤。付回使惟領留。前索五經正義及兩寺新額。即付回使。未知何緣中滯。想今已達矣。茲者復兼承大藏經。來使體雅。意

求之殷懇。豈不欲勉副雅意。但前代高麗之時。所印經藏。復因衰季。喪亂幾盡已散。以及本朝。深山古刹。密有遺貯。累將件帙。奉塞貴邦之請。近緣國家專尚周孔。不崇釋教。時好不存。遺失不收。年代浸遠。無留餘勢。轉啓良年好之義。徒懷愧恨。惟希恕諒。餘冀雅撰無愆。不宜。

嘉靖十八年九月

禮曹參判姜頭

牛王社 大經堂の替にあり株田彦太神を祭り

奉行屋敷 日頃より花巻を治むるの政務を委せしめたる是なり 元占役所 日頃より

鉄多居 日頃より今程の残り長寛年中の建立といひまた一説には足利氏の巧を修へておきぬといひ何れも其證を得ず

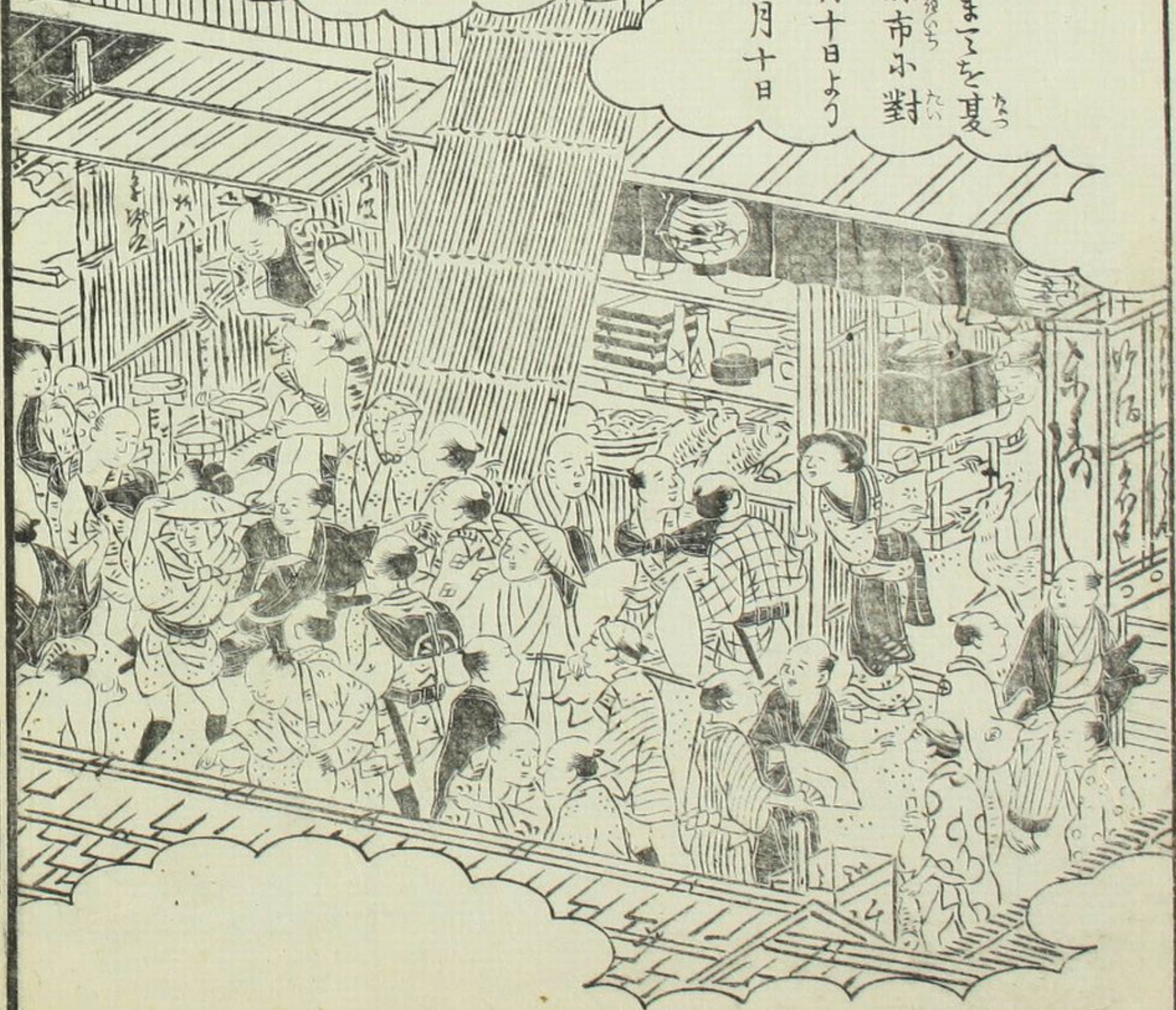
服浦 國府上御田所氏といひ此岸小船をかくる例なる故に

有浦 平家物語に「服浦と作り訓日」記ゆをよはし用たるの惣名に東町小にて敷町小とられり所謂岡町幸町中間町の町魚屋町此の町後町西蓮町同奥町新町濱の町小浦とあり

一島の要津小して賈舶つ祢小來往一櫓声呻軋として朝暮間

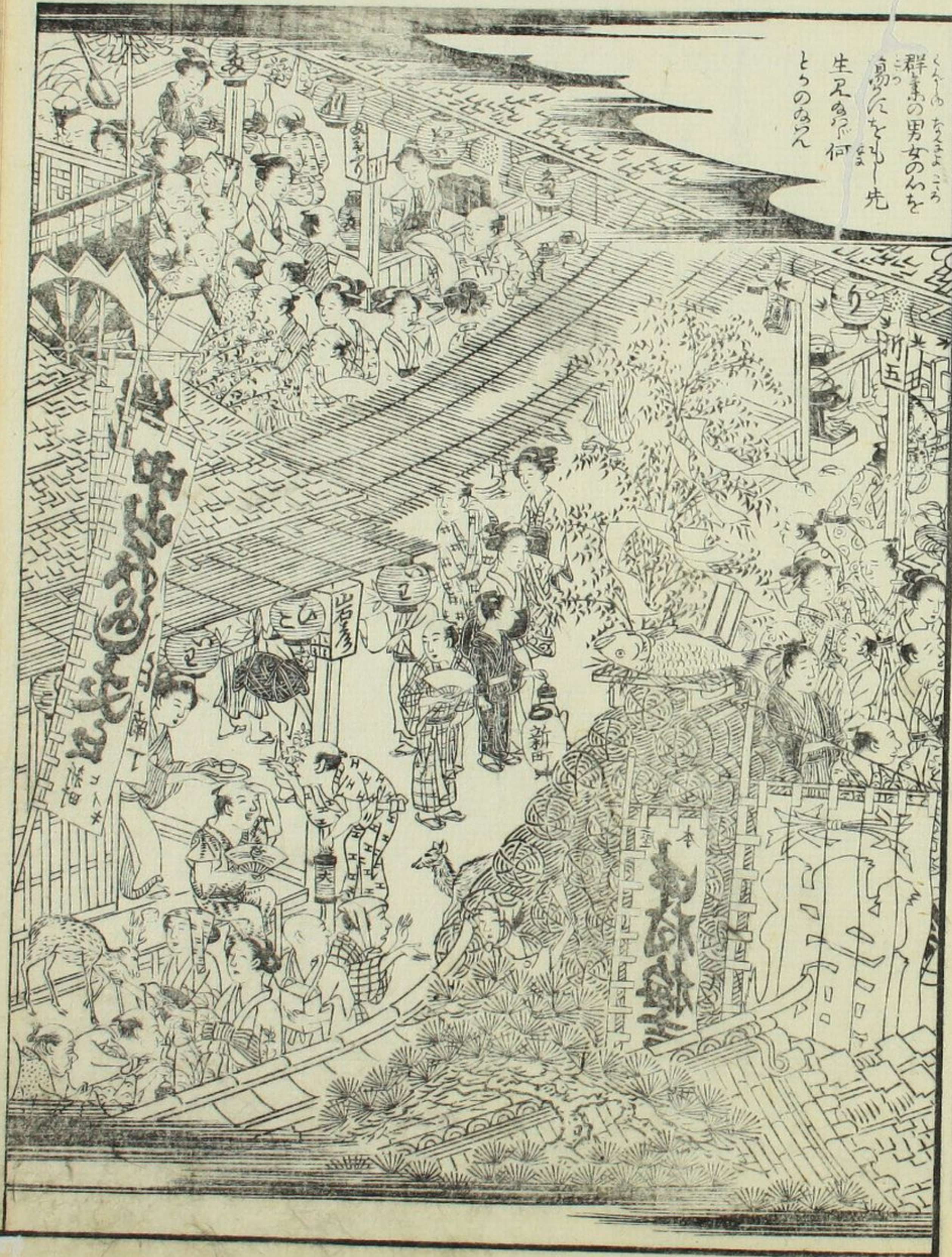
六月市立の届

六月の十日より七月の七日までを夏
 市といふ夏市の春市燠市小對
 せる号なり春市の三月十日より
 四月八日小訖り燠市の九月十日
 より卅日小訖ることを
 年中の三市といふ然し
 ども春燠の二市の夏市
 の比にあらずその鯨魚花
 雜鬧譬ふる小物をたひ
 夏市ありたり府
 城廣島へ更にも
 いそ次近国の商賈
 肆をこころ移して諸
 色をあねな小殊は十



七夜管絃講の前後を
 座次事とて賣買の
 子のまあはむ或
 は哥舞妓或ハ
 弄丸或ハ揚弓
 或ハ擗補鼻高
 假面の俳優ハ岩
 戸の敲子をや習
 ふらん登壇こ
 る龍脱ハ茅の
 輪の序後や学
 ぶらん吟呼祭
 礼ふる子をよせ
 各の利を営むも
 こな昇平の代の駿
 なるら



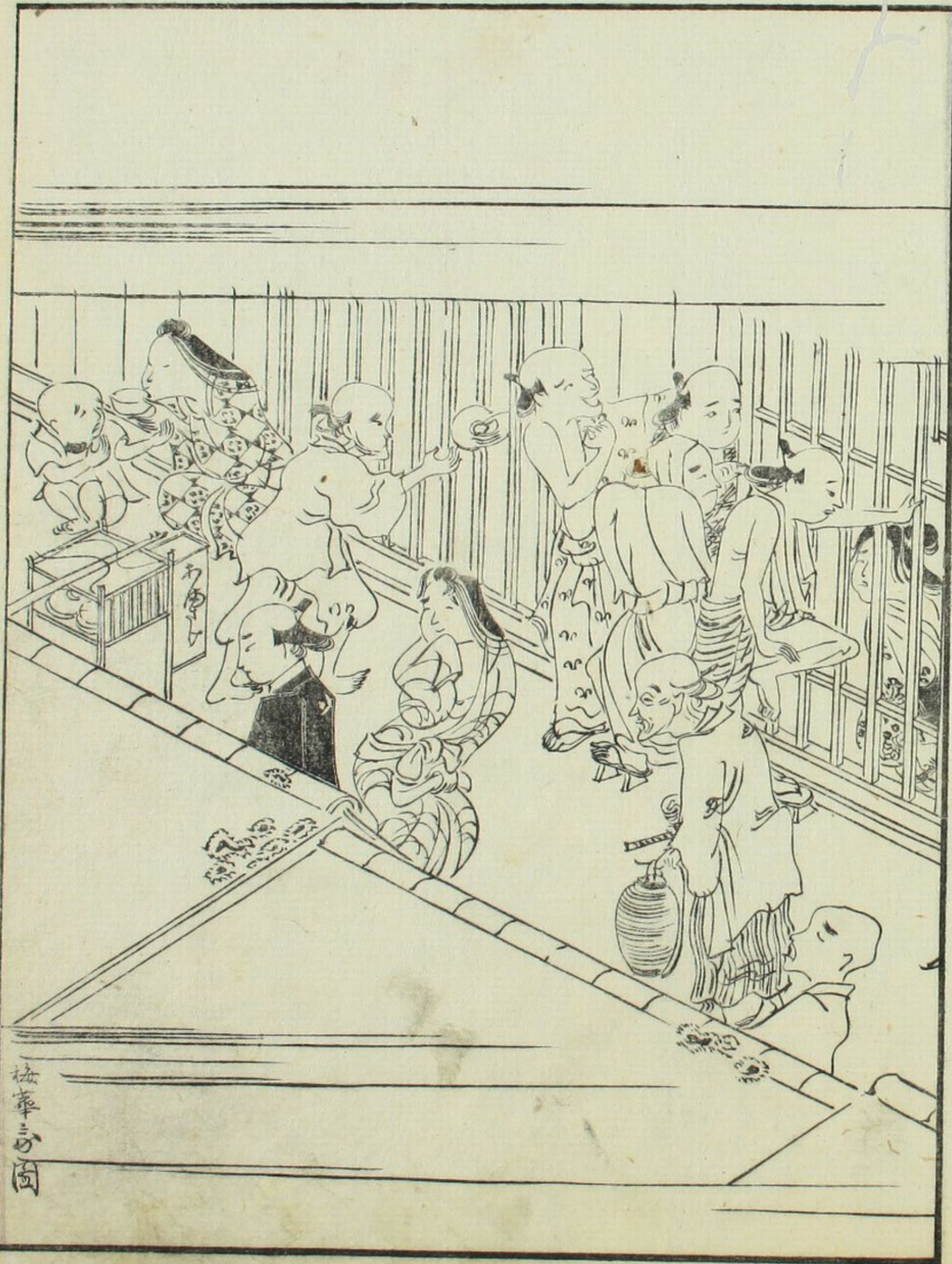


群衆の男女の心を
 奪ひ去るも先
 生足る何
 とのあつん



歌舞伎芝居の窟

毎歳の三度の市は歌舞伎
 伎の名人あまきまり大宮の東
 の舞臺を於て勸進貞行と京
 都の顔せ倍花の三の替は
 もての地との旅ひて西海
 第一の劇場たること世ま
 志す所なりとてよくこの奇
 舞伎といふ慶長のころ
 わひは出せの久糸といふ女
 より世に名をはへし僧衣
 を着てとて佛号を
 唱へ念佛たるといひた
 徳田の豪末一刃と核
 へ髪を断り歌舞伎と
 一舞舞伎と名つけたりとぞ
 當時の奇舞のまゝと古画
 まるきよなる小な竹村の
 まがこあも熟るをばり懼
 せし朝光の天懸舞より
 して凡俗の毛屏とをば
 取りぬあつん今世の巧くわ小
 巧くわをか加へ熊くま能のうをまへ



梅幸亭圖



金吾居辻君の圖
 かしらんわつりまみづ
 ありたなや名はたち
 君のいもつらまひり
 ねあらはよはもりうた
 祭と職人並歌合う
 よせりらるをたもふ
 浦の波のよる能ち
 たりも繋ぐぬ舟のう
 ねこるこもて汐風
 顔を晒し露の
 に袖を濡してあだ
 たるもの免み身をや
 つまびらきをせあは
 社ありの
 二ノ廿六



断たちだ昔むかしの地ち海うみ濱はまへ入いり江え阿あり今いまハ市街いちがい連綿れんめんと
て昔むかしの侍さむらいたよも足あえ次つぎ

高倉たかくら帝てい陽やう幸きやう記き回わい二月にがつ廿八にじゅうはち日にち還かへ幸きやうの御船おんふねたてまつる内侍ないしども

汀てい小こいいていななままととなく日頃ひごろの名残なごりのひねもひるけ

ままちちありありありあななららねねちちままよよけけれれううここつつららままつつれれとと阿ありりくくば

たたちちううささななららぬぬ有ありりの浦うらなれれ神かみもも然しかららぬぬををかかるる波なみ

風かぜももししづづにに物ものののほほもも終はるる春はるふふくくちちりりちちりりななりりたたるる足あしし申まをししく

ゆゆららくくねねおおええてて三さん月げつ盡じんななりりににららううきき

足利將軍義植公西園下向のと紀

ここううたたののむむ神かみののああららにに有ありりの浦うらありし昔むかしののままききのの波なみ 義植公

尋ね来て神かみ小こいいりりののちちりりららににおおききたたをを思おもふふかかりりぞ 聖護院 良愍法親王



たふのさやう
塔園揚
枝店

有浦客船 八景の一

つなねよるたうやりの浦浪かとほり定むる船をらばそふ
 こがてふ沖さぐ船のよう来るに神ふねうひや有のうら波
 夕ふらつちたてしとかもこのまにあらぬ見るや有の浦浪
 激漣波光有浦前石磯一望水連天無朝無
 暮問津帖去々來々幾客船
 群帆落日向十山繫纜翠巖碧石灣借問東
 西南北客夢魂應不至人間
 古岸候風賈客船吳哥巴曲度鷓州不知遠
 夜蓬窓夢魂與月明到幾州
 有浦風光何所有晚來唯見旅人船定知吟
 得張公句猶聽鐘声平夜天

參議公長

宣阿

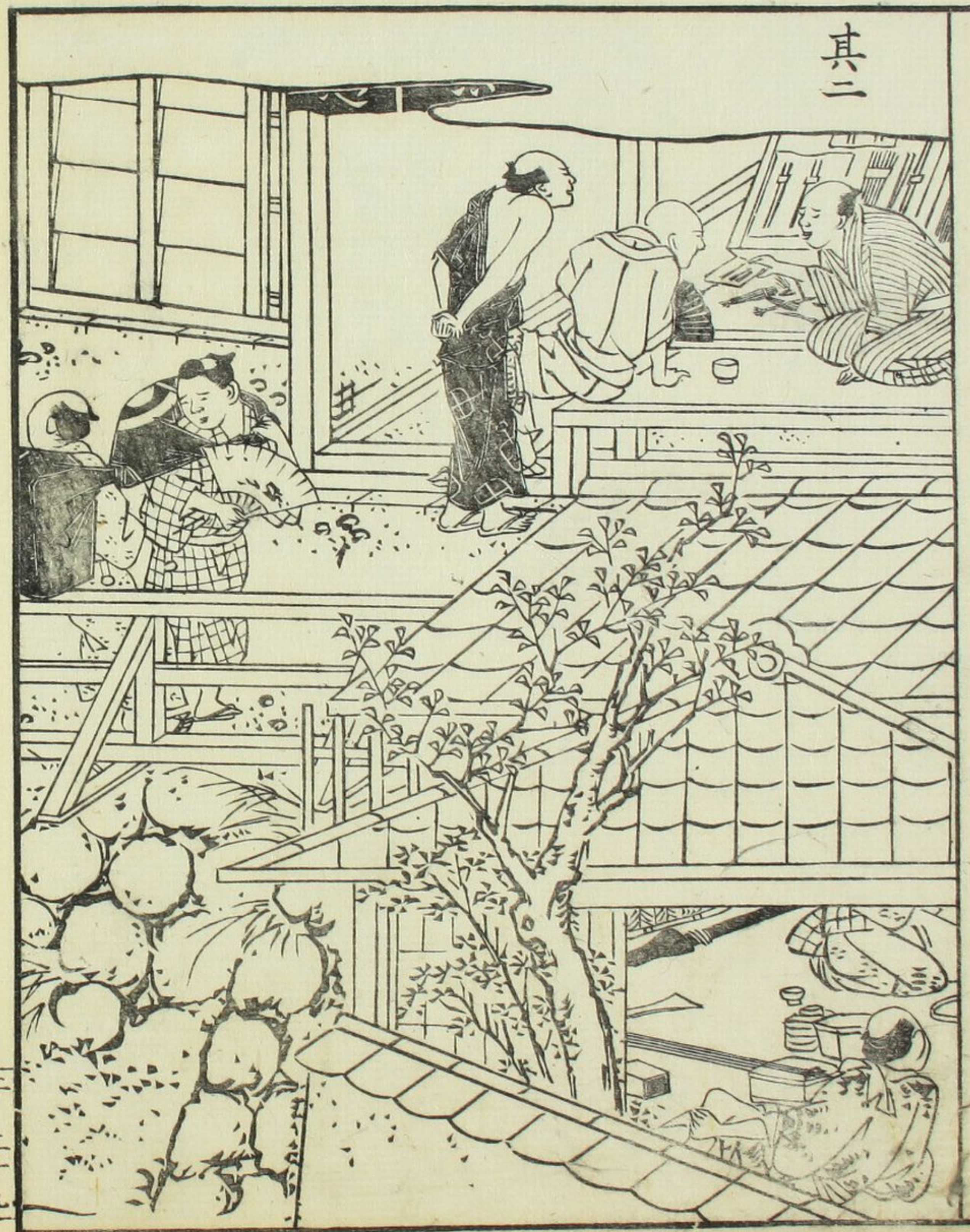
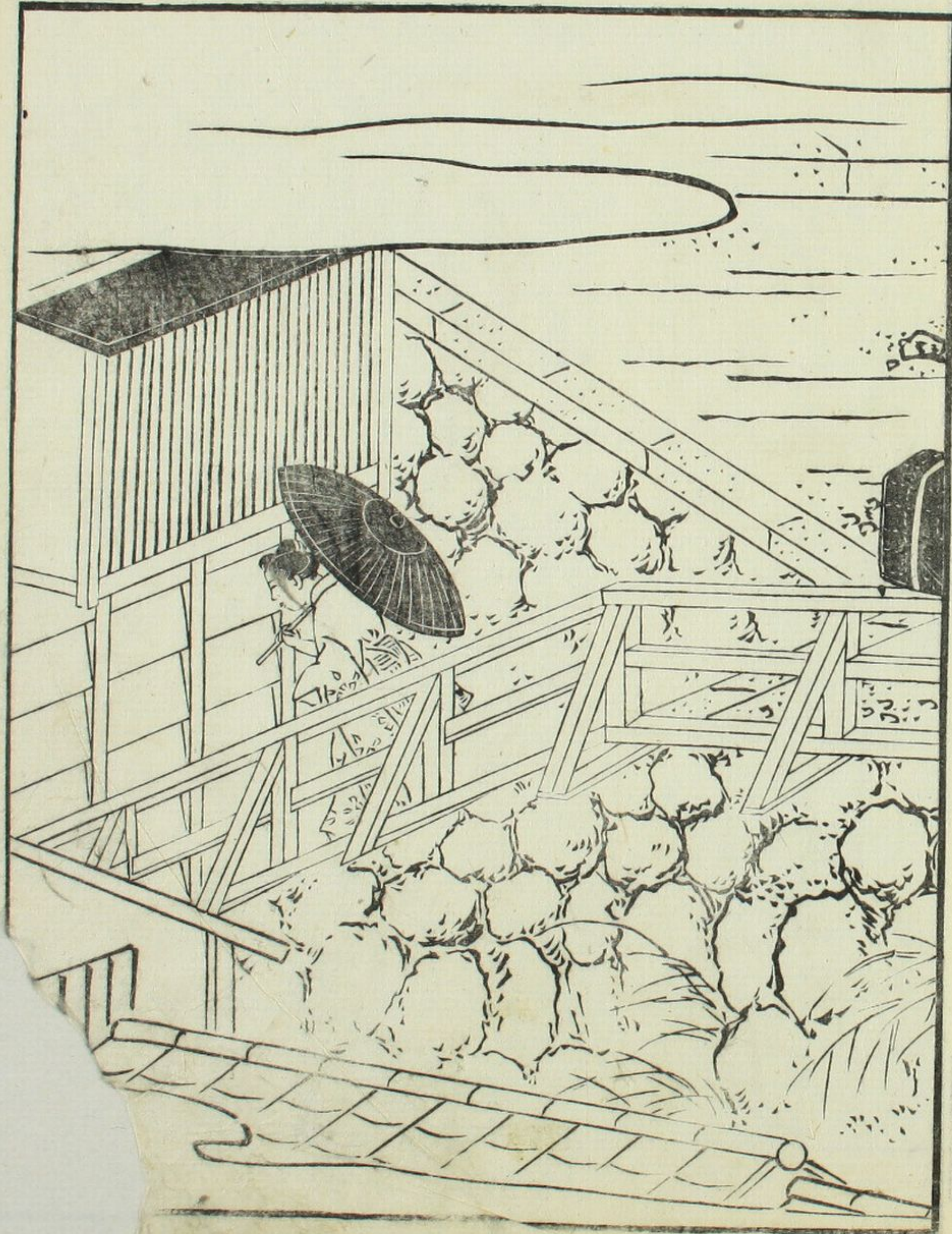
似電

氏部藤原為經

僧獨麟

僧瞻雲

僧仁峯



尼洲 ちのしゅう 一少二位の洲ともいふ有
の浦乃沖の洲とあり

傳いふ壽永のむらゝ長門壇浦小て二位尼安德天皇の

小投せし糸袴の戸け洩れたよひより糸その穢を惡みて其取の土

を捨しとて今尼公の像神泉寺あり

圓城院

南町あり社僧あり奥坊神納寺と稱し閑基いふと詳なり天和年中東仁和寺の末流小房せり
中より當寺の住侶歌をこのまにれいそのゆかりを以て玄旨法印投宿せり其きそのゆかり

本尊千手観音

九物その祀よいたくやとけりぬいたくの坊といひたることよひの塊

まつり此手向などかまへれはるるにまことちとぎ次のふと声

三三急なけるをそ糸巻いしもかたうにゆるるとたつ祢糸先

づゝゝ糸ことなりといふ一そびよみてつゝゝなる

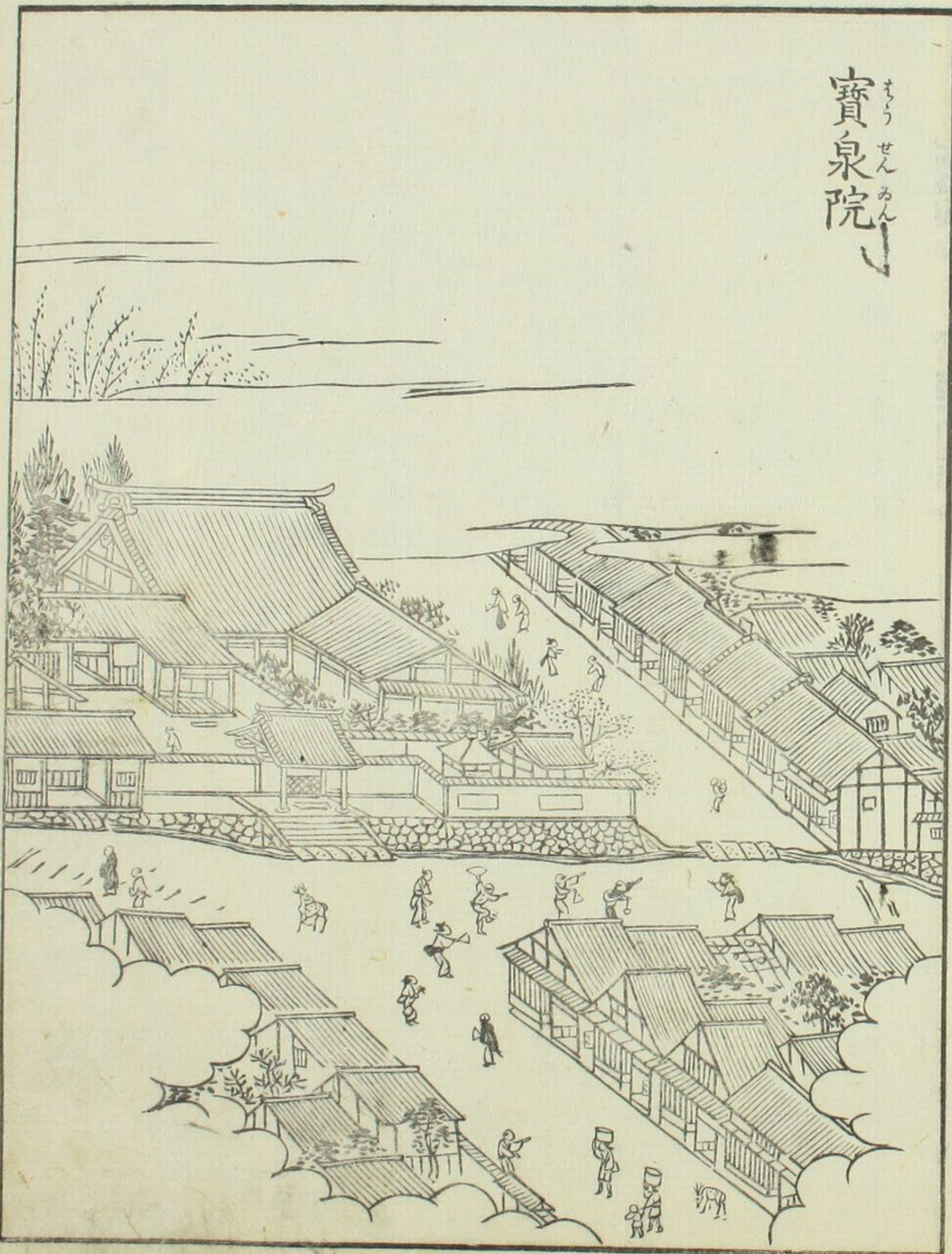
志下の山こえつやまつり時多たまつるよ此空ゆなく彫り

玄旨法印

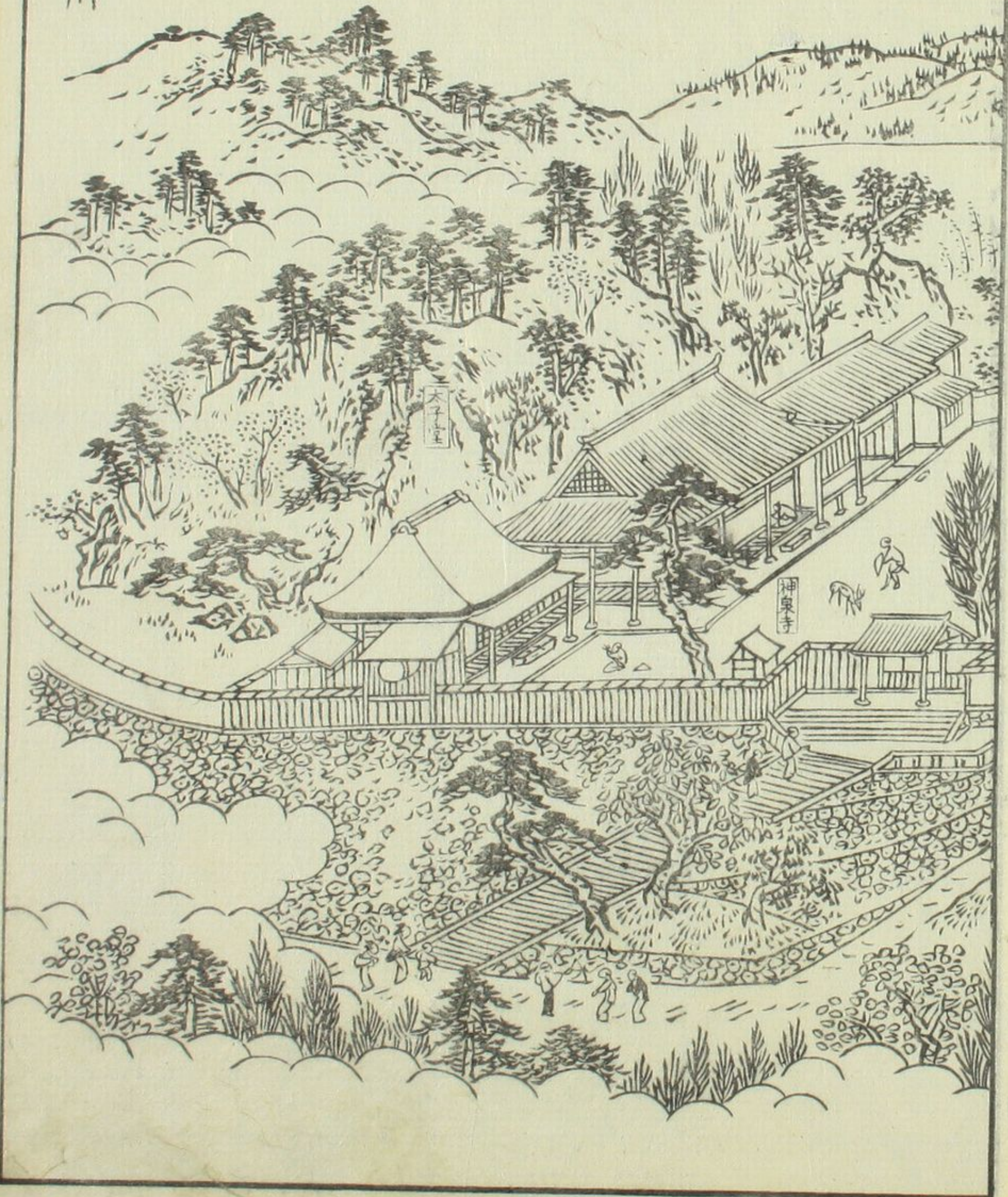
道成山無量壽院神泉寺

浄土宗なり晝夜更漏を報むるを以て
俗に時寺といふ南町あり

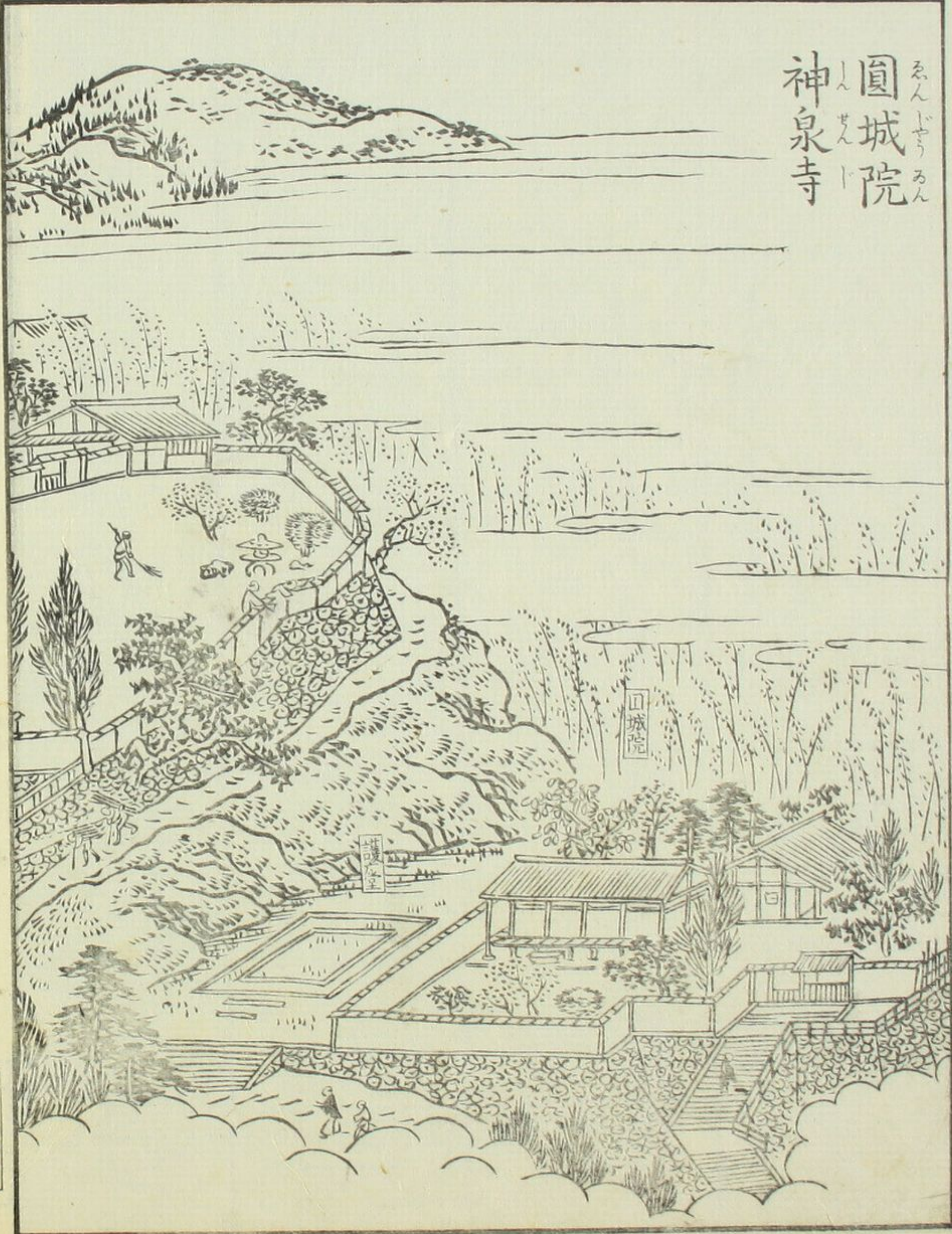
寶泉院



神泉 錐舊 景殊 新日 遊不 厭頻 試倚 層軒 窮活 眼三 子世 界一 微塵 寺田 臨川



圓城院 神泉寺





二位法尼肖像

尼公八平相國

清盛の室

建禮門院の

母公

安徳帝の外

祖母なり神

泉寺に其像

を安置せし縁

故に本文に詳

なり



奉尊阿弥陀

座像長三尺

御長三尺弘法

毘沙門

御長不動の作

智證大師の作

中将姫像

二位法尼像

護摩堂

當寺岡基の祐光上人あり

但一岡基の年月詳小せ

房顕記のい

なく壽永のとい一平家西海に論没せし時

二位禪尼の尸有浦に

漂ひ来り努この故に阿弥陀堂を建

一一道場を開けりといり當

寺一亦阿弥陀寺とよぶ

二位法尼の像を安置せれば則

壽永の建立なること明らかし

此原に宗青天台あり

此天文のころ堪阿上人中

興して今の宗小改多しといふ

華隆山以八寺光明院

神泉寺

宗京都智恩院

奉尊阿弥陀

立像御長三尺

惠心僧都の作

岡山以八上人像

經藏

庭内小あり一切

末寺四宇

以中庵称名庵紫西庵れよひ島の

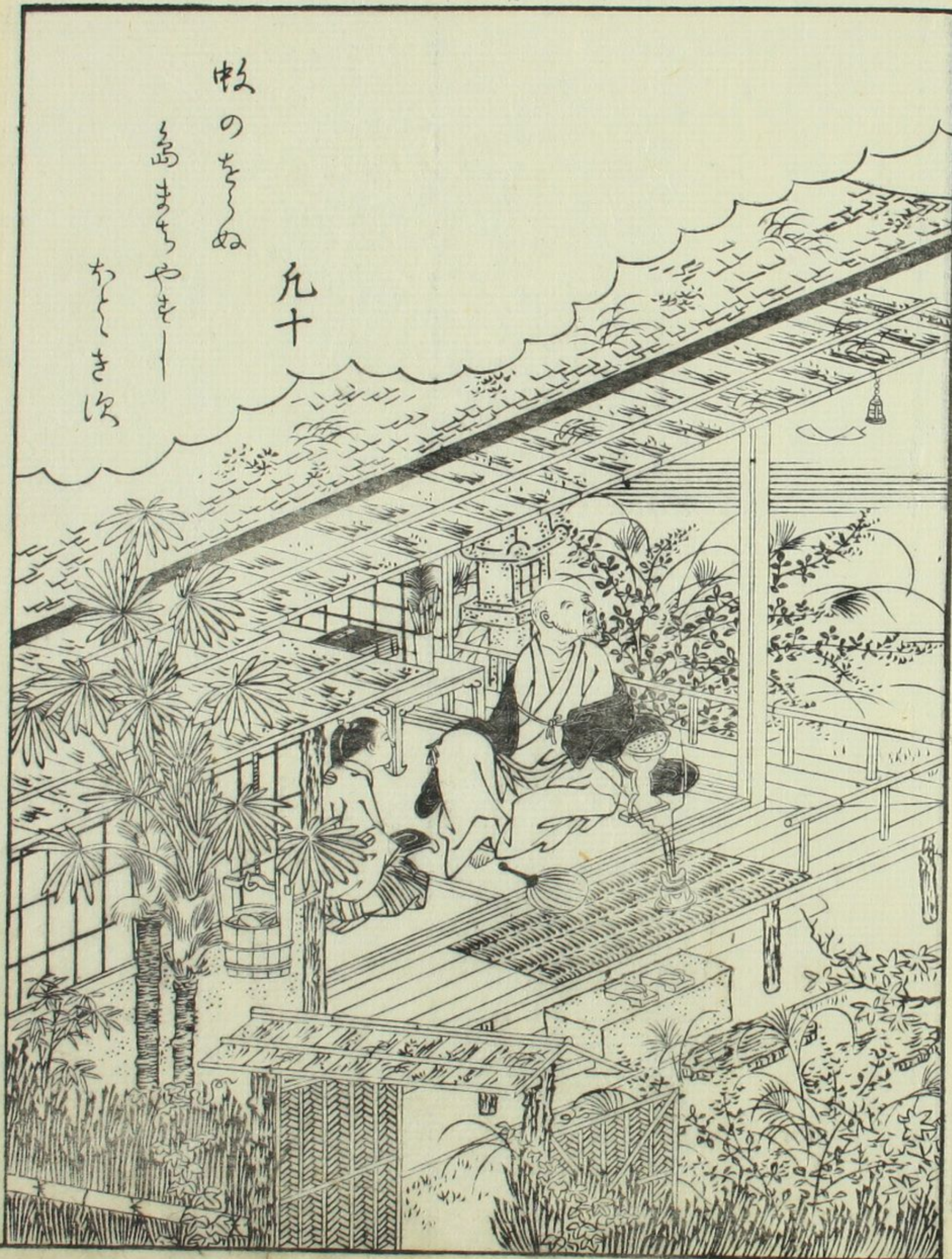
命指方村小西念寺あり

當寺の岡基を尋ぬるに天文の頃

以八袋中とて毘沙門とも

毘沙門とも

不凡の



杖のきぬ

九十

あきき次



げん
玄旨法
印郭公
杖聞
あき
ま
ふ
苗

聖れも一紀弟の袋中の檀王法輪寺を再興して京都三条に住たまへり
袋中の行徳都名以八上人を繁華の地を厭ひ當島に來り此寺に建つと
西番會不著
乃人あり其の母子に無き歎憂て辨財天女に祈請して桶小舟
舟入て頭不戴き髪を翹て月影にうつら宿し何れ小奇瑞を得
て誕生したまふ後不出家したまひて德行いませかりり加茂式部
大捕どのの不信の人なりは被りいさ其の僧を試さんとて招請あ
りて齋炊設け家老二人相伴しして其の餐應小こりく魚を
炊料理一艶色ある女子五六人草の羅を着せて給仕小出しもの
乃隙よりうかひ見たまふ和尚自若として暫く眼を穿たまひ
多れを料理せる魚をい忽ち飛躍り給仕せる女子いとく骸骨
となり勢を捕留の何れりの愛相小大それとら紀忌を即坐小

改悔發んしたまへみなもと此如くおなりし和尚教化祿んごう
小したまひてそれより安藤の園にいらたまひこの島小住居をいめ
らる常小美藤なる女十余人随仕し多れを誹謗をなすりて
聞たまひてその女とも法談の席へ呼出し汝等ゆゑは他小舟
しりおなさしむること予がかなしみなり急ぎこの所を立退く登
し雲ありしは海上には波浪たそりて暴風吹さまりり
多れを聴すの人といふと肝をひやを西小舟も嬌艶な
りし容忽ち舵形となりて黒雲とも海底小舟入にたる誠
小天女の十五童子現つらりて給仕せし免たまふ事この時をト
免く知りしとかやその後一月の別時念佛を脩したまふ八
百日もさ勢るらる島の社人たき加れ教人小一粒の爰ははと
ありて残るところの二百日社内よつとむきよし示現あらた



以八上人
說法之圖

芳園

小支度までにおよびうばこの上いとてかの別時念佛を社内わうつ
 してつと免らるるまで百五十日布どへて和尚靈夢の告有りて日れこ
 の田向の日小阿そり往生次とのこまひうばそのよ遠近小閑え
 ぞ倭いくふ万となくいつまりたはて日中おなりうば群集の者
 小高ららに十念授けて往生おとげたまひたり紫雲西方より
 駿駿天華降り妙香白ひ微妙なるるどおわろしむ老少陸在
 の海わし何むを佛骨を拾ひとりて結縁せんと待りけり小俄小
 潮とながり来りて一照の余灰もなくこれ海中小流き入りと
 なん實尔龍神の供告せしことよとねおえてつと尊とくまこれ
 ようさ此小或人上人小肖像を畫いて讚をもと免られ
 きたえねたむらげもうたこの世の残さくとも水らたの
 かくよみてくうたまひ勢上人の遷化の實尔慶長十九年九月十日

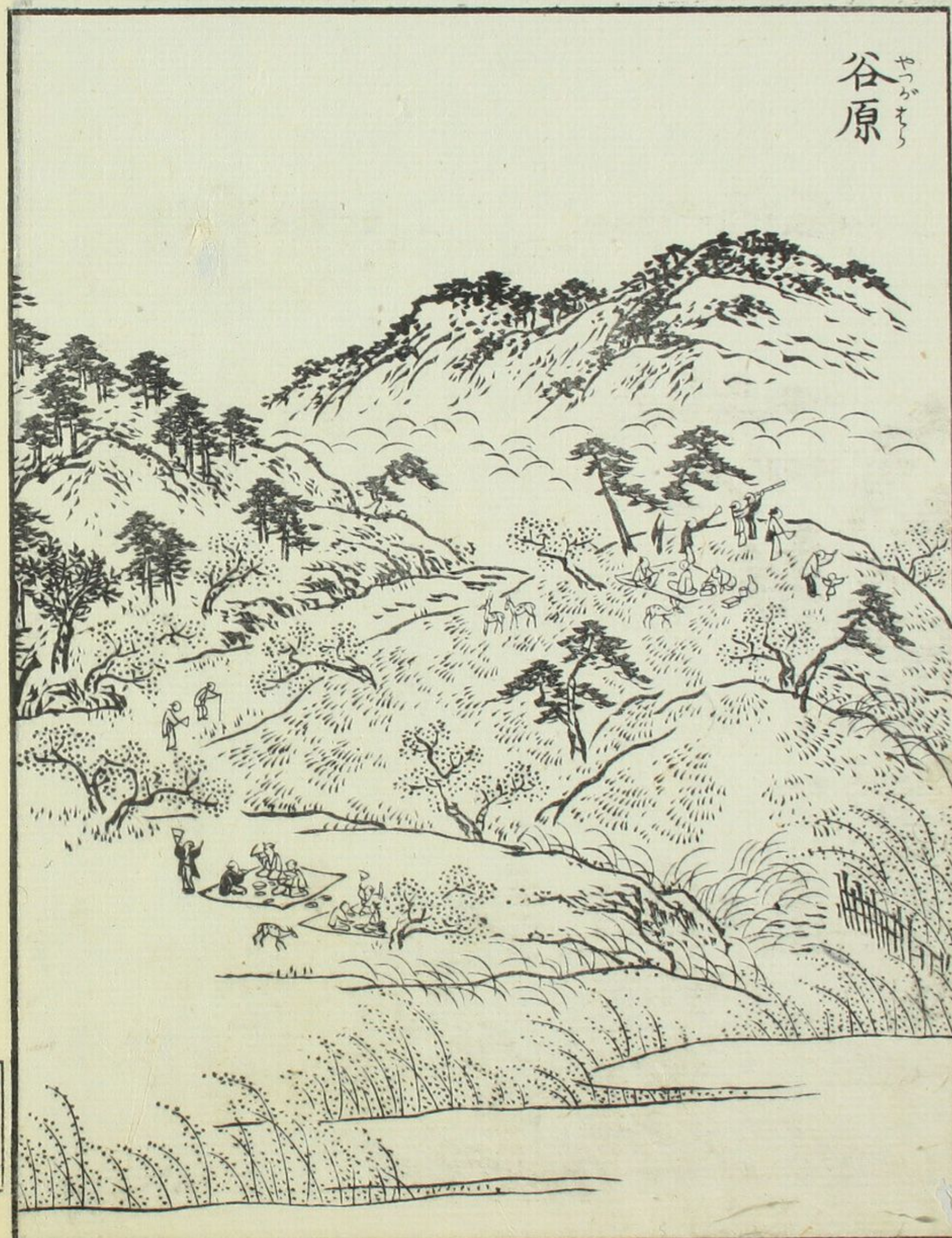
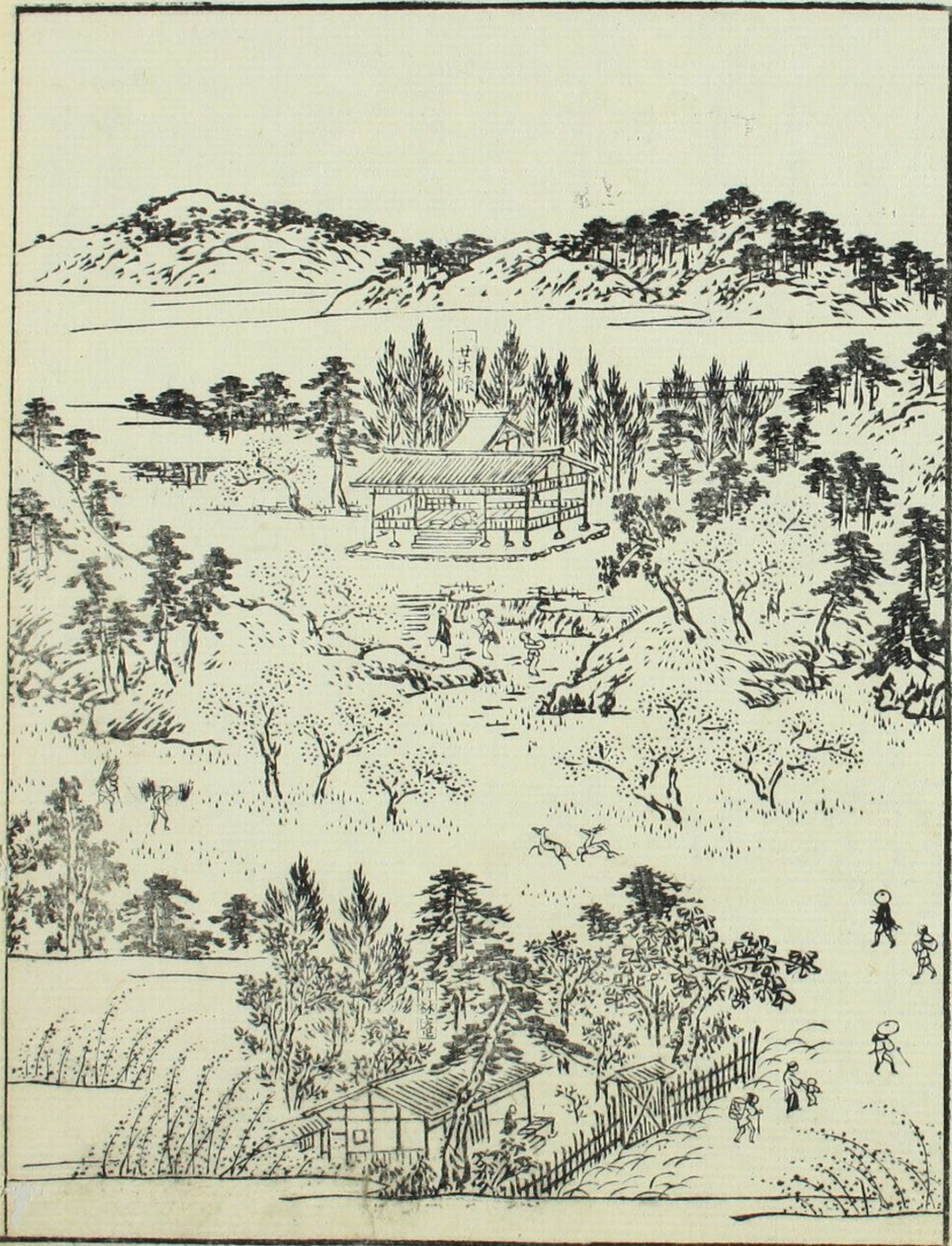
の事あり今も正月十九日の中上人の月忌始とて請る人おわし
 什寶

- 光明院の額 普蓮院の宮傳 澄法親王御筆 六字名號 圓光大師の筆 日名號 惠心僧都の筆
- 引證弥陀經 圓光大師筆 称声弥陀經 中將の筆 地藏尊畫像 弘法大師筆
- 圓光大師畫像 自筆 弥陀畫像五幅 弘法大師筆 般若心經 覺鑿上人筆
- 一遍上人畫像 上人自筆○は余叔父の筆

谷原

紅葉谷の右手をのかりて平曠の原阿り常小麁麻群をなせり本
 本の梅のもみちゆるころいまこ一木のくれをそへて秋色實尔
 堂次(きと)後あり

谷原麁鹿 八景の一
 たく麻のこゑの秋なるやつく糸をぶの根いとをなかり小 風早實積



谷原やつかもと

谷原麋鹿

殿邑
安守

波あふ

いろやま松

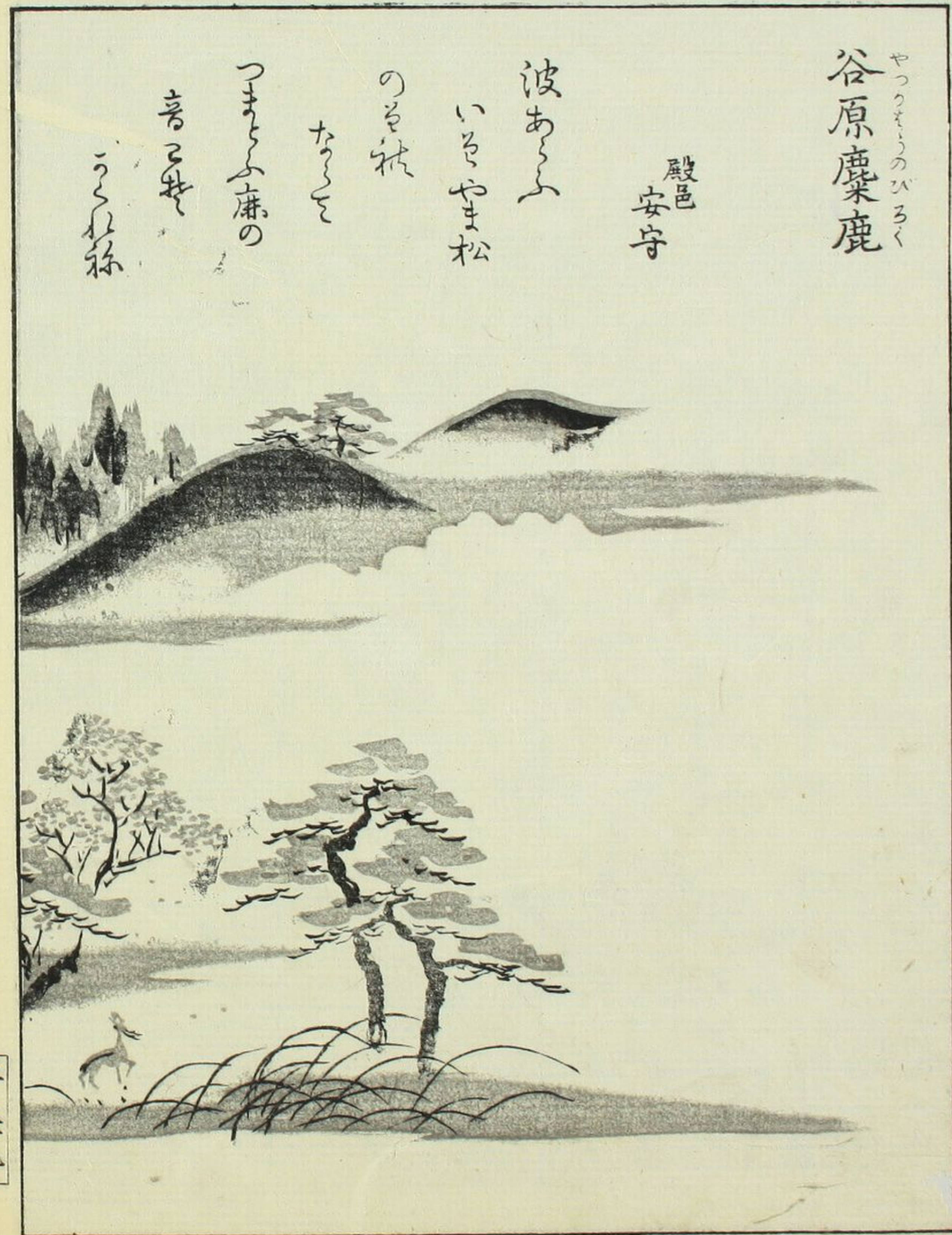
のそ秋

たふ

つまふ麻の

音こせ

うゝ糸



寺田 臨川
雨餘豊草満原
春水緑沙明境
自真麋鹿知無
羅網患啣々不
敢遊遊人



晴川花法寺藏

夕されり麻の音ききしやつら系はさぢいろづく秋の何し糸 宜阿

傳道原頭物色幽。清風爽氣不因秋。數株松 菅原為範

樹陰森處。且暮只看麋鹿遊。 僧獨麟

豐草茂林地自幽。引群仙鹿足優遊。慣着來

客能相狎。不識狹奏弦矢憂。

谷藥師堂 同阿

中間谷 中間町

鳥居松岡 同阿の上あり松二本立ちひ立ち

こ此色より大仏系へこゆる山路をづく櫻木の林なるゆ名は弥生の

頃の花さねふちひく韻人騷客歸るこそ所忘れしむる處なり

人磨社 中る谷

中間藥師堂 同阿のたぐ

道祖神社 幸町あり一々 祭神猿田彦大神 陰陽石 同社の後あり俗道祖神社神体なりといふ

北藥師堂 藥師町あり正月十二日法堂

寶光院 藥師町あり社僧寺あり天和年中仁和寺の末流あり

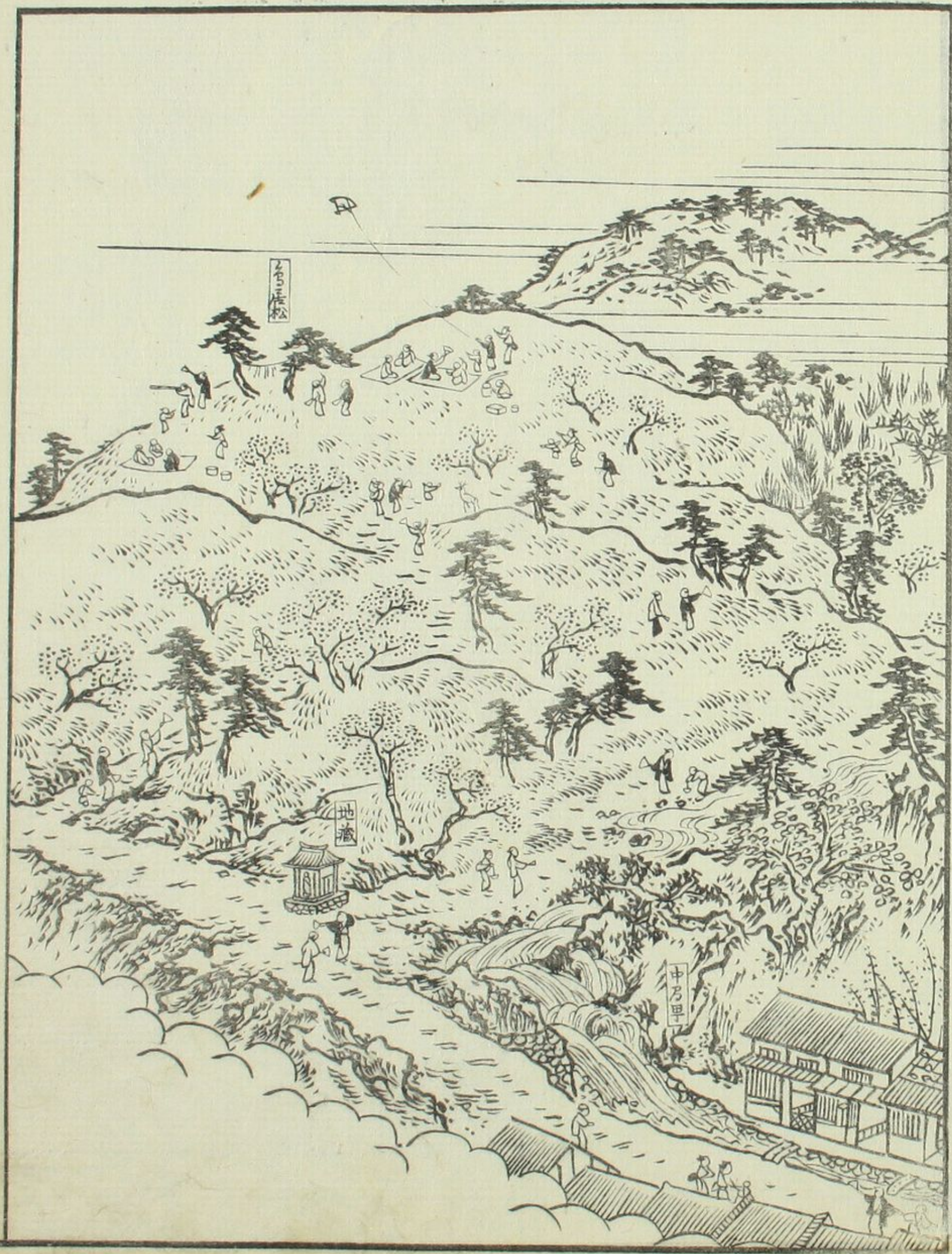
本尊十一面觀音 法長二尺一寸弘 昭士不動毘沙門 各法長二尺

龍上山西方寺寶壽院 日阿のわくあり真言宗 京都仁和寺の流

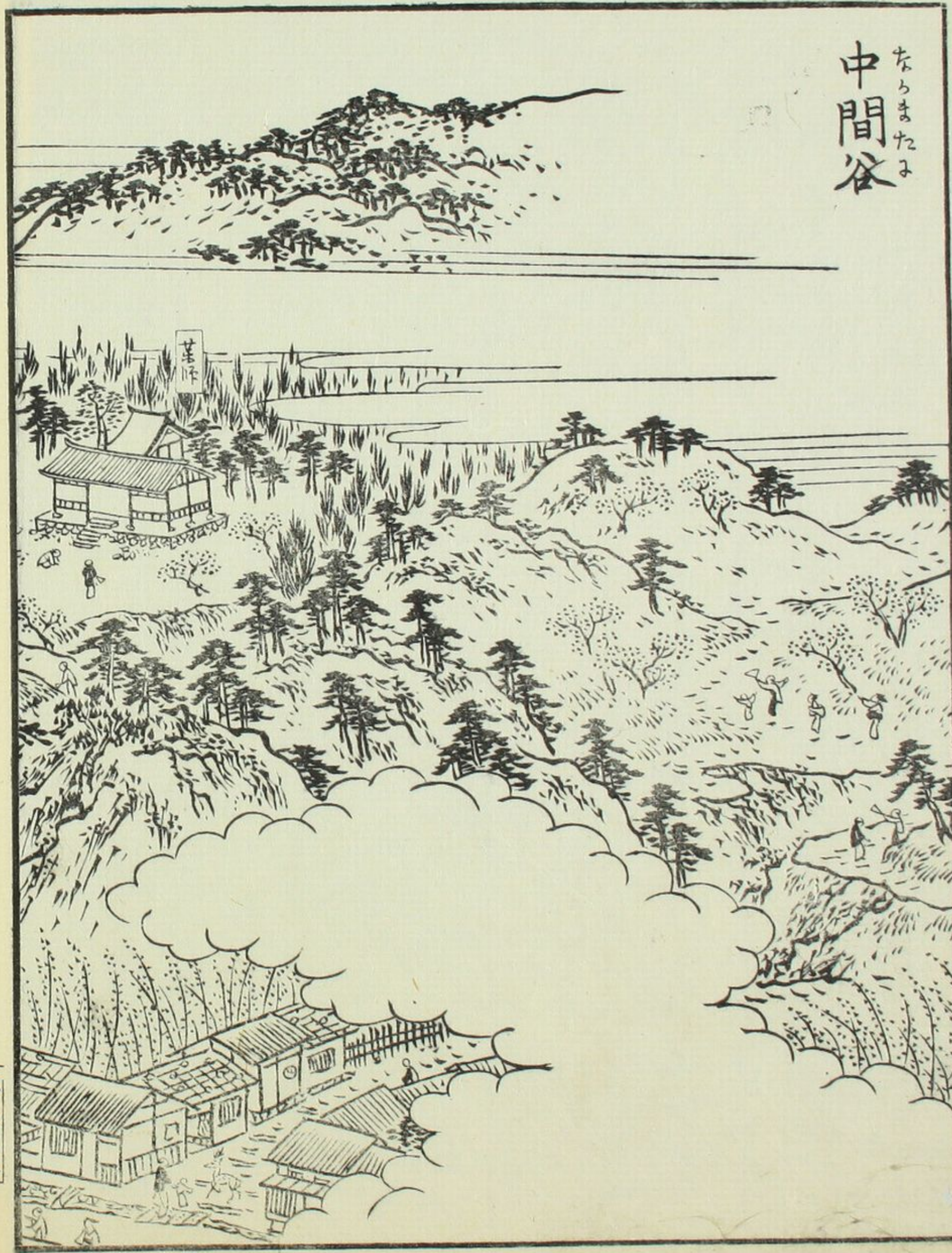
本尊阿彌陀 座像法長 昭士觀音勢至 各立像法長一尺三寸

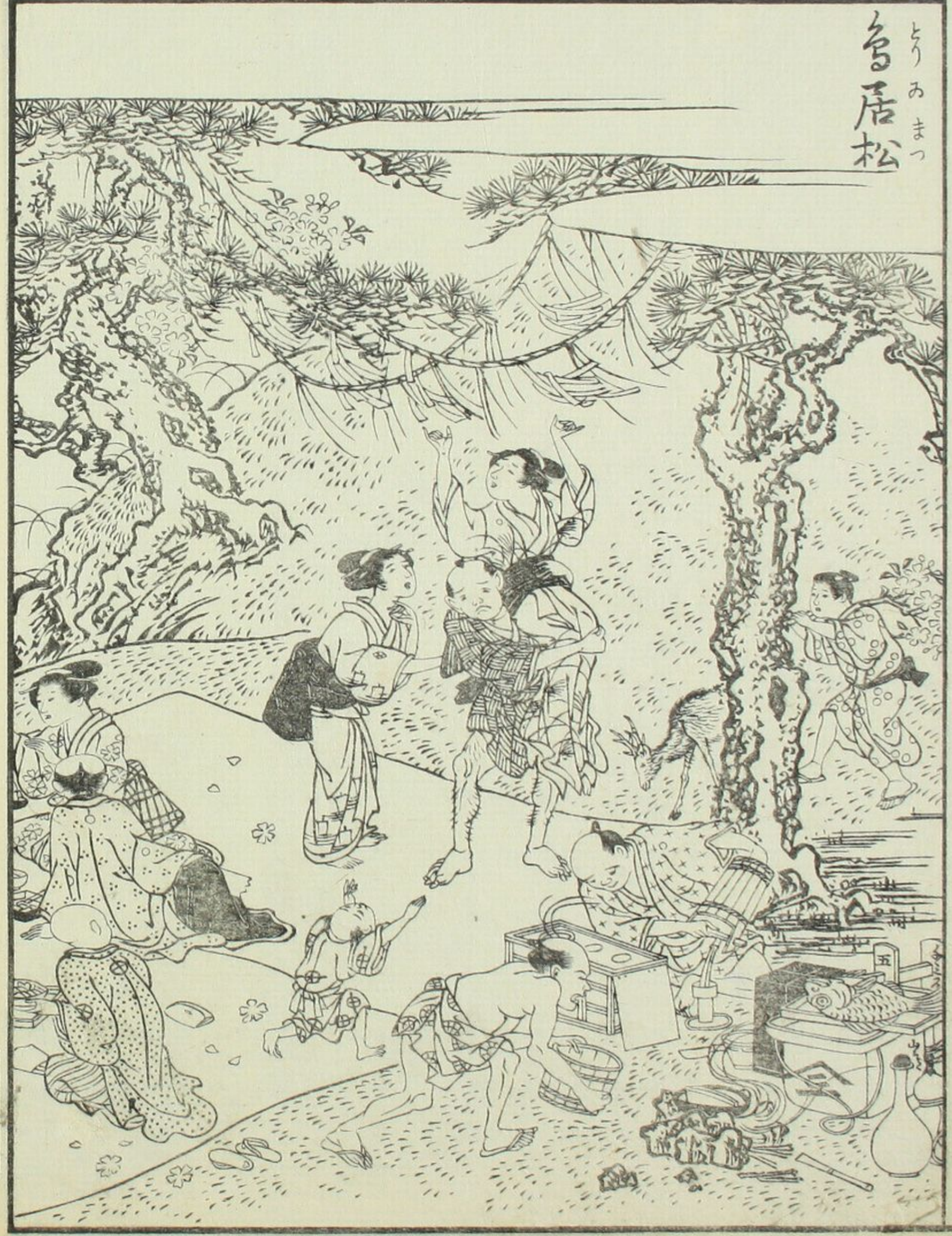
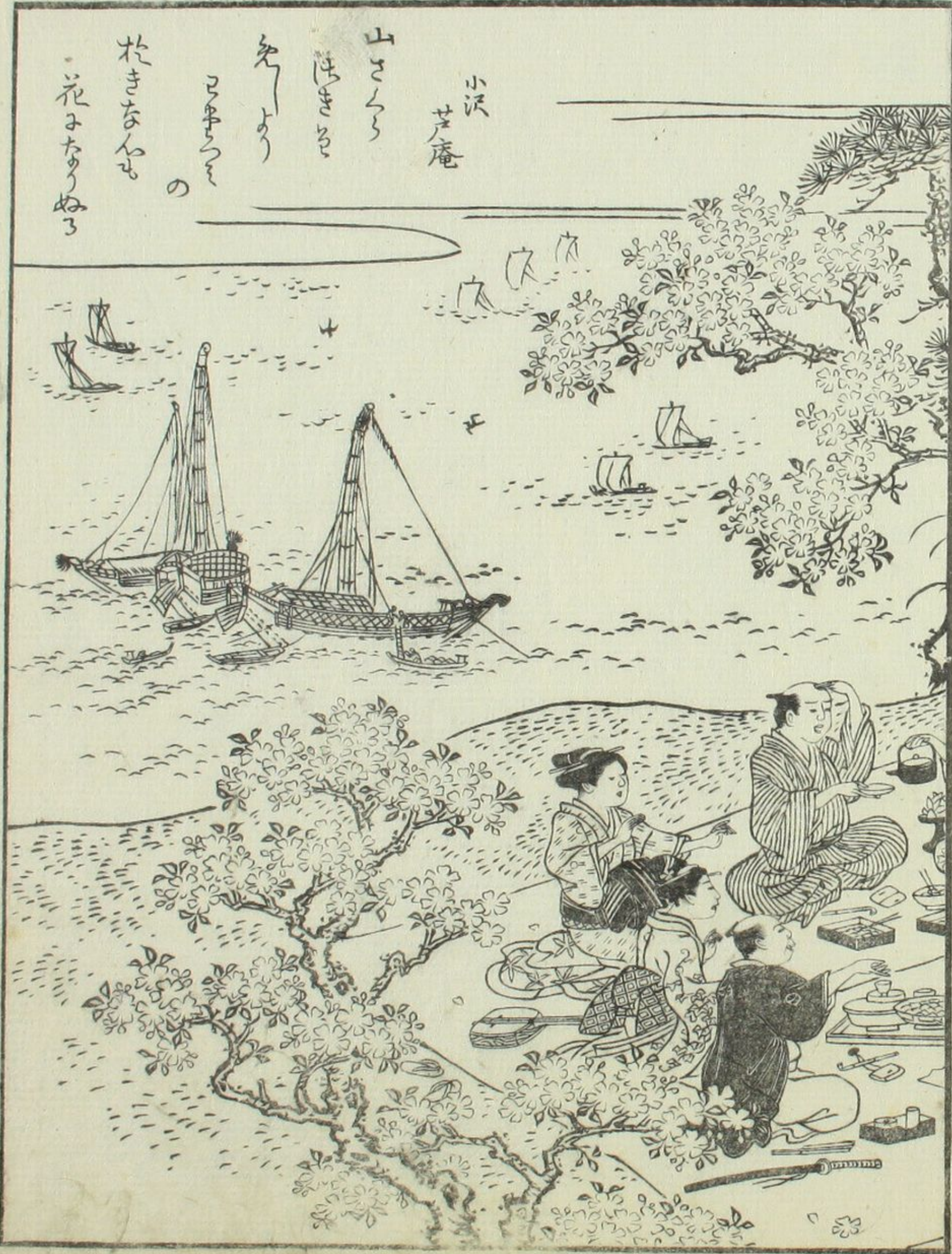
觀喜天堂 境内あり 鎮守金毘羅社

當寺の寢基詳なること如得む文安年中宥順上人の中興たり
そもく當寺の安置奉る本尊の由縁を尋ぬるに往昔この
浦小堂火の何そよなく先を放つもの有り来往の人くいつ
ねとらき且怪しき漢父の命しそこを細せむるに豈たか
んや大聖弥陀の尊像にてぞねをきりなる島人のいふも此



ちりまた子
中間谷





らなり遠近の老少つこ一聞と尊信渴仰の輩いとわち一時小住園
 斗藪の比丘有りけるがこの靈應未感して身を拖て諸人を勧
 進し遂に一字の建立を尋て文安のころ高野の学侶宿願上人
 辱くも天奏を経て堂宇を再建しまはしく本尊ハ龍刹より
 たてまつるといふ由を以て山を龍上と号し寺を宝壽とを称し
 りるかりしよりこのかた信心崇敬の輩たゆることなく於今靈
 應まこと炳然たり

付寶

不動尊一幅 弘法大師の筆

三尊阿弥陀 惠心僧都の筆

唐畫五大尊一幅

觀音画像一幅 林宮寺の宮老の筆

唐画藥師

明の嘉靖中聖烈仁明帝画工小舎にてあかり免たまふ物なることを

福壽院

大悲山と号し空寺院の抱地あり

廢愛深院

空寺院の境内ありて新日山頂峯寺より久しく廢し今その本尊愛深明王ハ空寺院小をさるる

神力寺

西蓮町の上 本尊不動 身長二尺二寸

大湯堂

同所あり俗に大佛といふこの湯堂ハ本社之良あり鬼の鎮護といひ毎年正月十五日供僧の脩正令あり

本尊阿弥陀

身長一丈 昭士不動毘沙門

此地を大仏の系と稱し地漸く廣く花木多し弥生のこ後

多し酣哥の遊客花顔雪肌の者を率ね来たりと春色をもて

何そよまかり

廢龍翔寺跡

西蓮町の上の山あり京師紫野大燈國師の建立ありて輪奐なる堂舎あり

新町

東町の内より西蓮町の東にありて新町の後あり大木の標より毎年正月元日のつた御神前へ新衣を奉るに新刺衣の諸蓋の

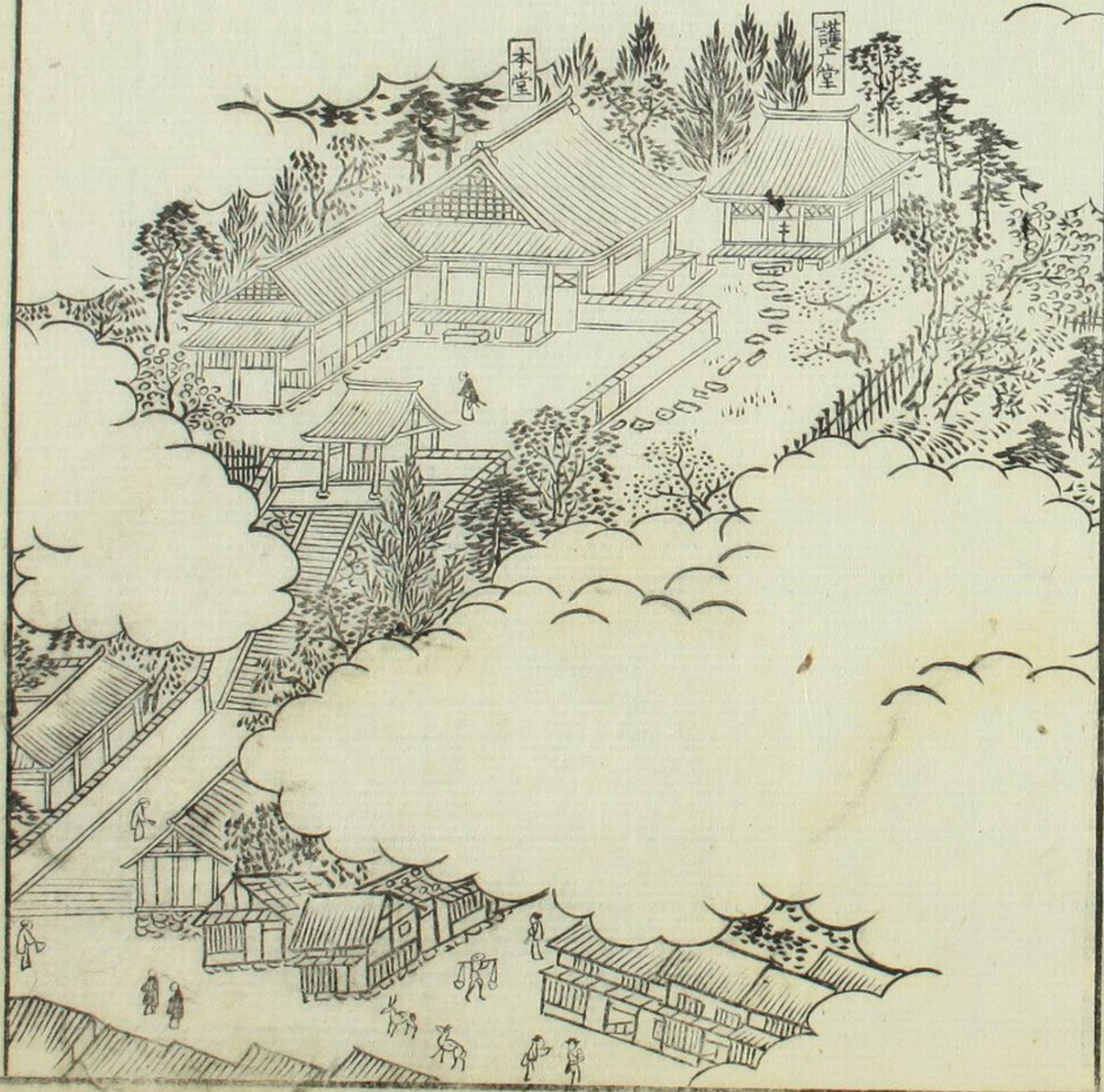
摺鉢谷

新町の後あり大木の標より毎年正月元日のつた御神前へ新衣を奉るに新刺衣の諸蓋のものを間てこれを伐りてこれをたてり此のころの青梅のうらまて怪死の者あり

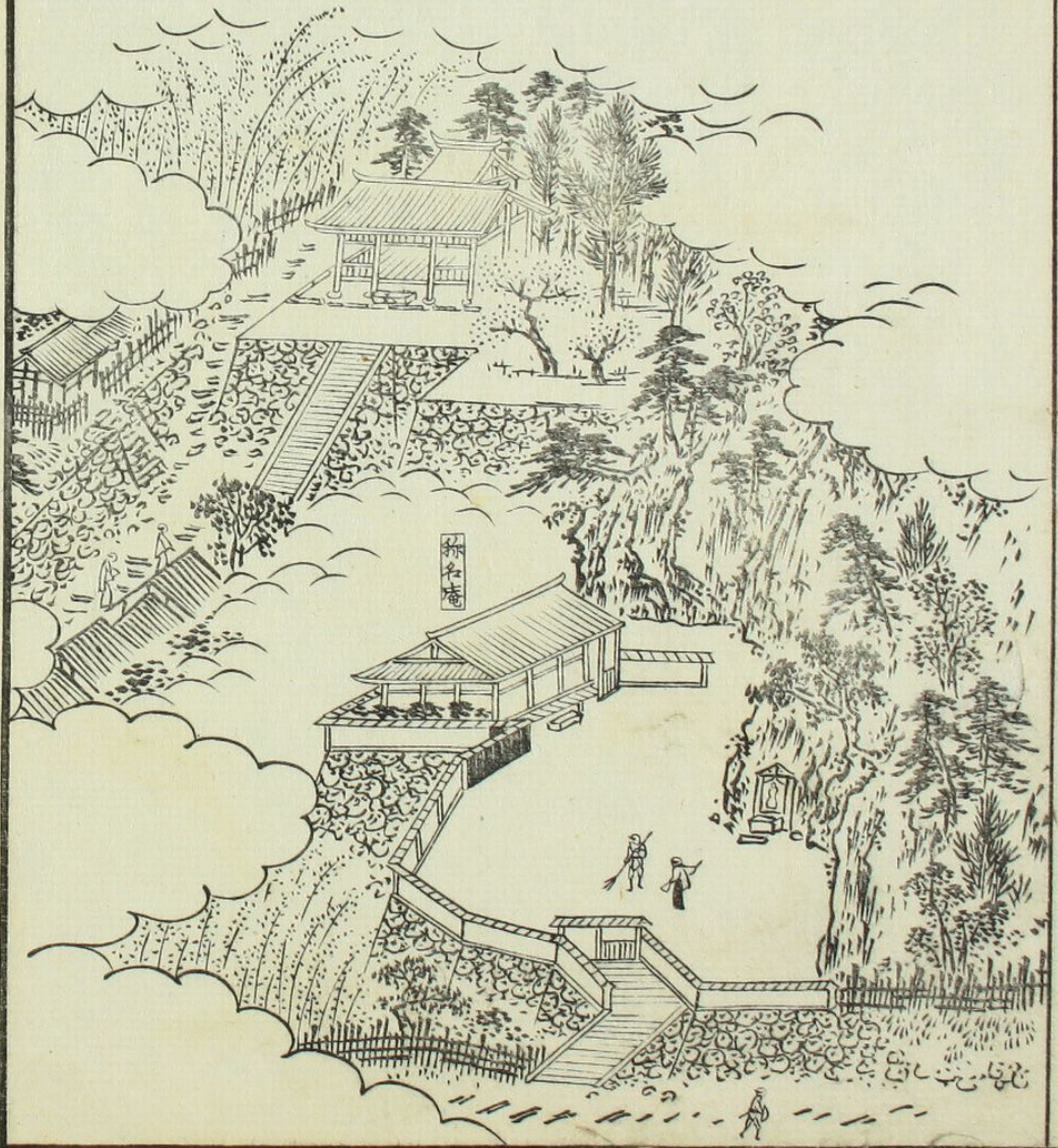
存光寺

存光寺町あり禪宗住持伯郡廿日市洞ヶ寺流あり

寶光院
ほうこういん



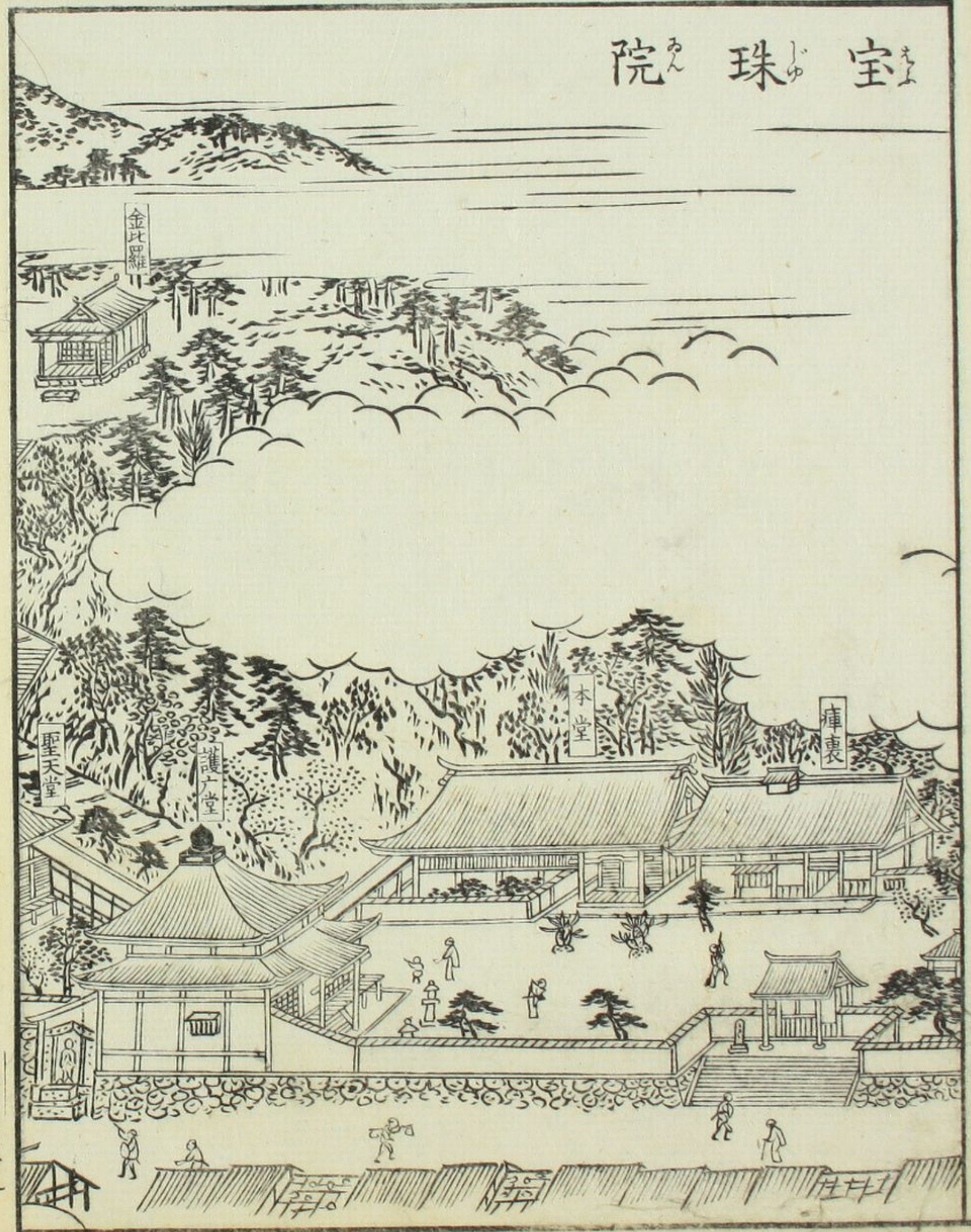
祢名庵
ねなあん
北薬師
きたやくし



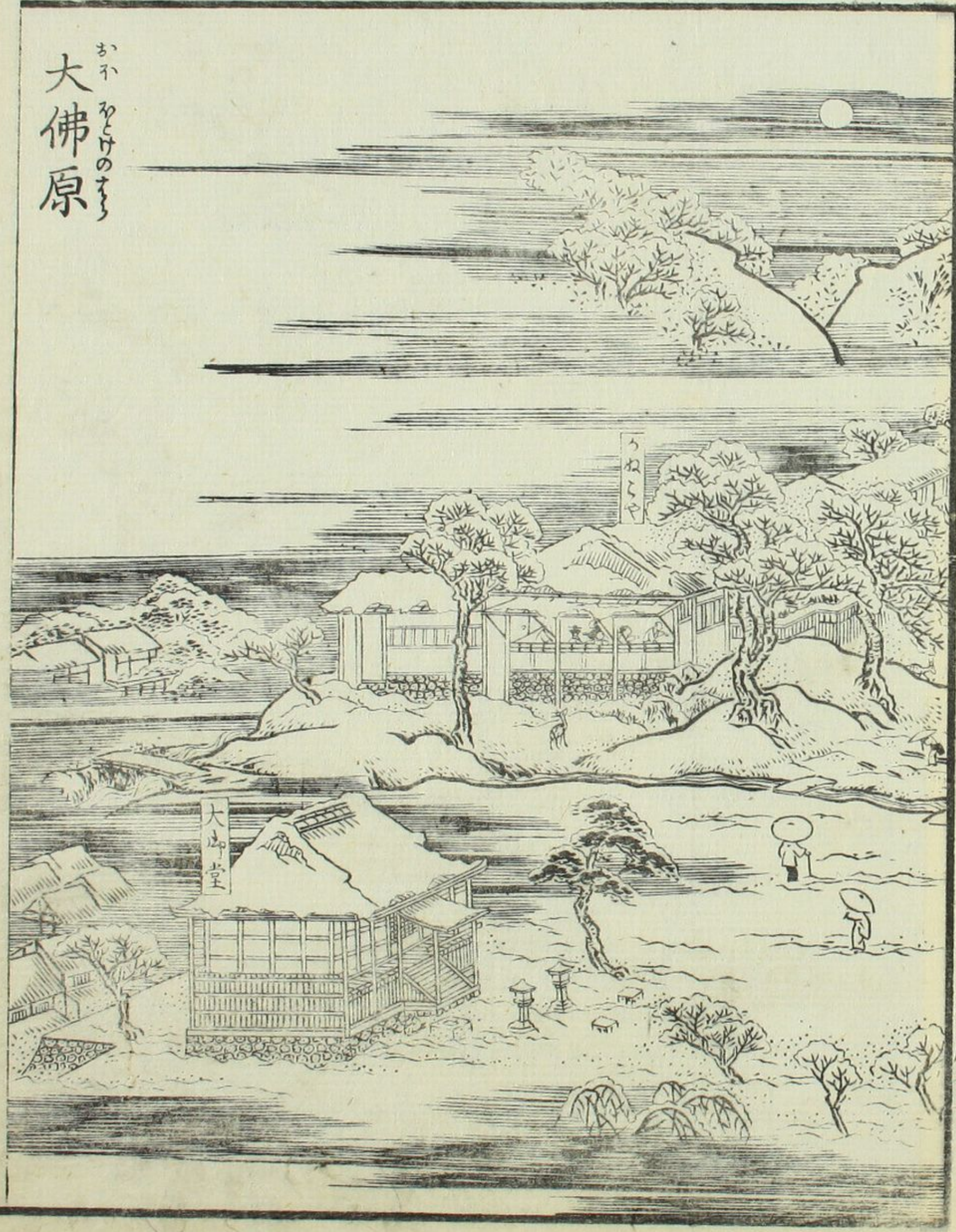
福壽院
ふくじゆゐん



宝珠院
たみじゆゐん



おん
おのけの
ま
大佛原



兼原彫刻



神カ寺

奉尊阿弥陀 立像法 長三尺

脇士観音勢至 立像各身長 二尺五合

當寺ハ和州多武の峯浄土院存光和尚の冨基小して中興ハ玄

的和尚なり

濱役取 濱の町中小浦小町り属吏 分番の舎なり

町會所 同取中

粉場 濱の役取小隣

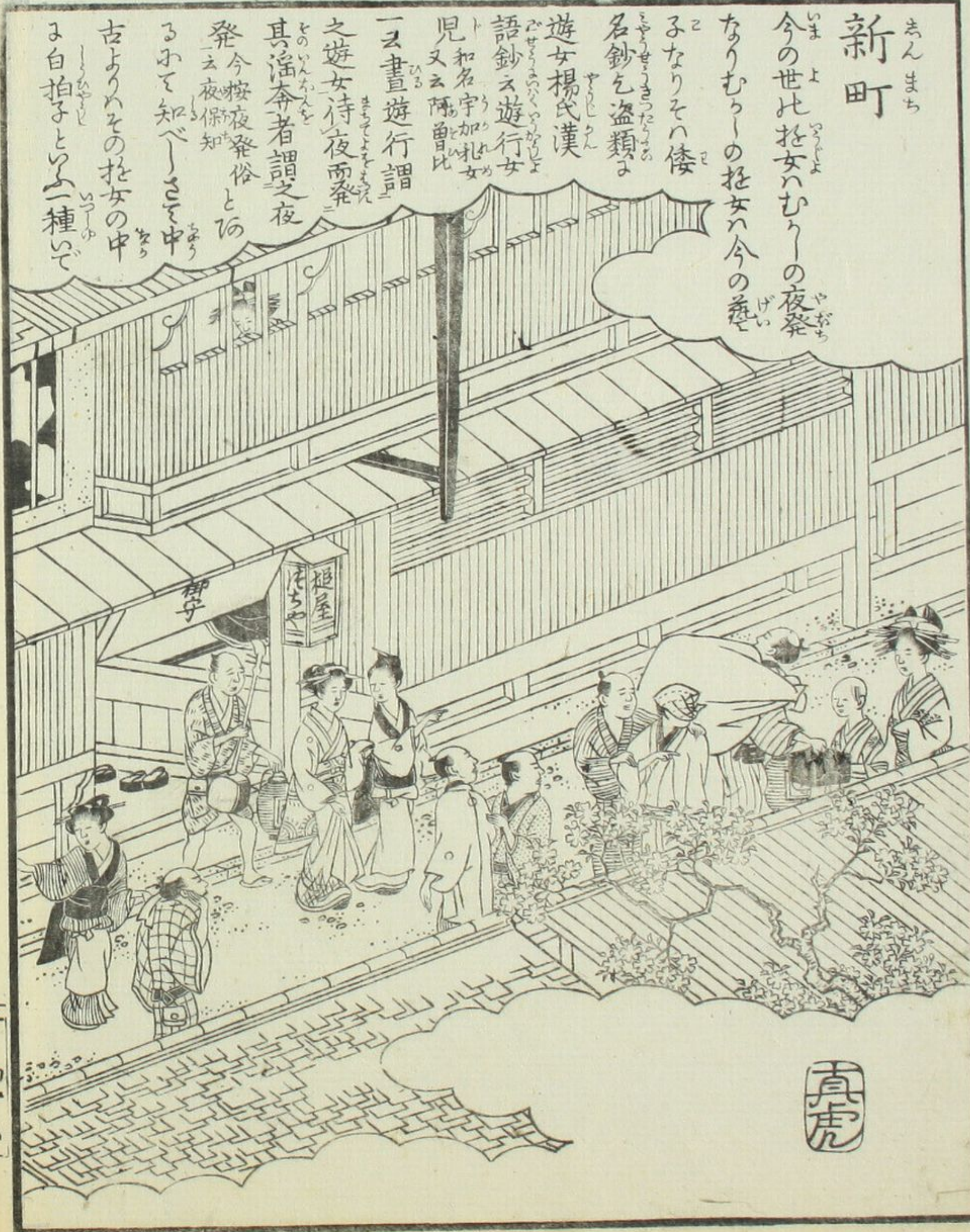
宮尾城壘 有の浦北の尾とよ一は要害の鼻ともいふ毛利氏陶金妻と 合戦の時城をこの所築りけりより要害の各ありと云

陰徳专平記曰毛利元就ハ隆元元春隆景父子二人ひそかに相談せ
られりる冬陶入道はと免そちち起うちに義長の後見として當
國一攻入へ一渠防長豊能の勢を引率せハ定々大軍小て整
るべきかくて冬予場の合戦其利を得んこと覚束なり吾熟
思案を免ごう次よいつりま小城を築き敵を呼引たのむ

陶我謀小陥て彼島へさうり城を攻落しそれより仁保の島乃
城を攻とらば草津櫻尾の城ハ攻ざるにたつ魚と工夫を河
魚の香餅小附くが如くうかくと渡海をべ一入道くる行を
こねむこと己ら勇小誇り軍術の危きを忘れ急ニ勝利を得
んと次る癖より起り渠勇なりといへとも慮浅くして人
侮り是欺くよ易き所なれば死地小陥れ一時かたどに
勝負を交次べきなり彼に城を築くこと敵を方便の
第一たるべ一と評定一交して天文二十二年五月下旬小ね
渡りて歛初一隅く蕩くの経営夜を以て目小継りはて鯨
敵追討のた免よとて明神へ金銀珠玉の奉幣手捧むかり
山の如く小積上る其外大聖院の良政僧都上卿祝棚守大
願寺宮僧社人小至るまで祿ありりればみなく大小よろ

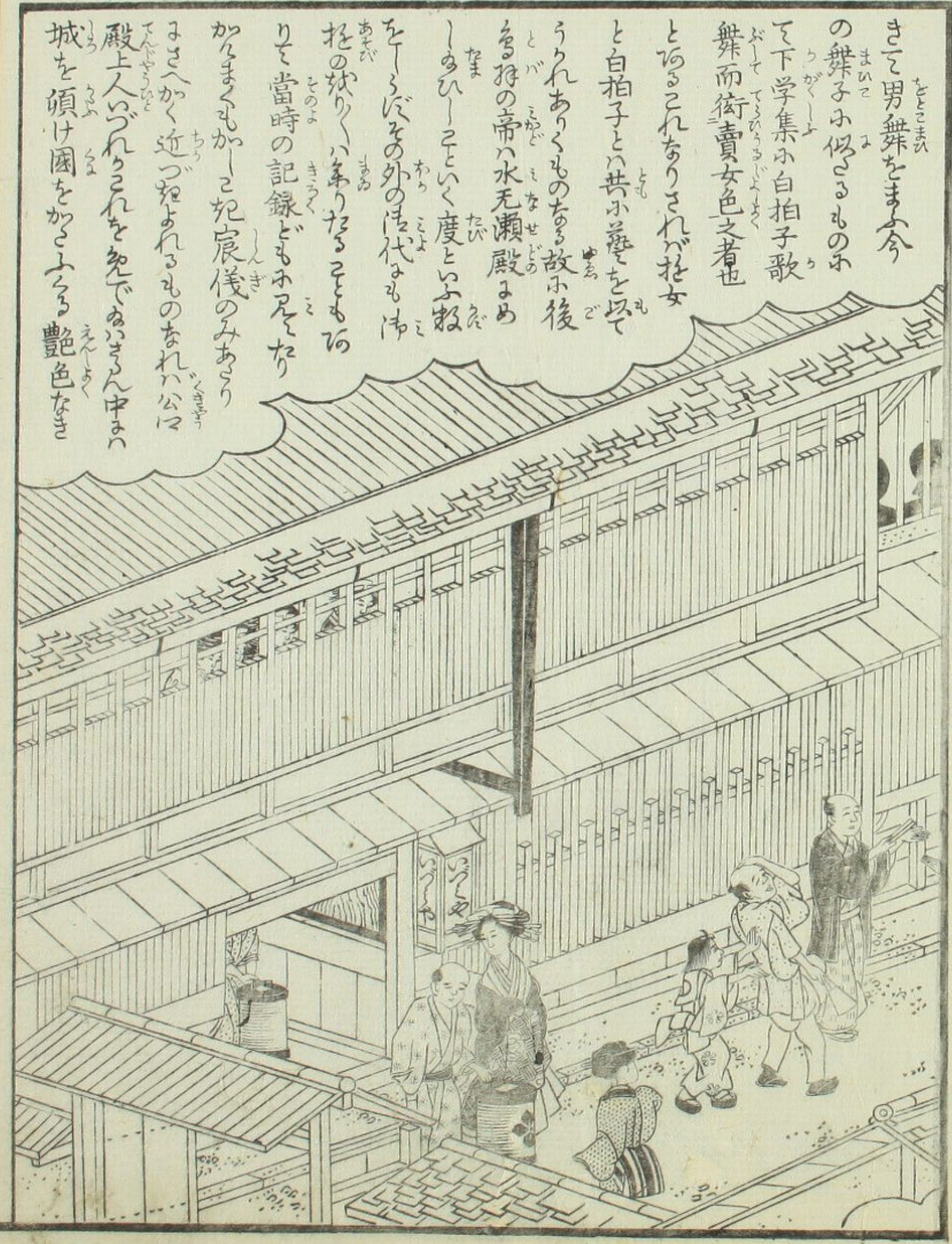
新町

今の世比花女のむりの夜発
なりむりの花女の今の夜
子なりその倭
名鈔乞盗類
遊女楊氏漢
語鈔云遊行女
兒和名宇加比女
又云阿曾比
一云晝遊行謂
之遊女待夜而發
其淫奔者謂之夜
發今按夜發俗
云夜保知
る小て知べ一
古よりその花女の中
は白拍子といふ一種



真虎

さて男舞をまふ今
の舞子小似るもの
て下学集小白拍子歌
舞而街賣女色之者也
とあるこれなりされば花女
と白拍子とい共小舞を以て
うられありものなる故小後
る存の帝の水無瀬殿よめ
一ゆひ一ことく度といふ
をいふその外のは代はも
花の状りい集りたるこも
りて當時の記録ともみ
かまふか一これ宸儀のみあり
はさかか近づたれものなれは
殿上人いづれこれを免で
城を傾け園をかよる艶色なき



まゝも あらねば思ひけぬ龍を
 蒙りて幸ひを取らたひも於ち
 かり夜発の柱女やうかろりてた
 淫奔を發するむかりたる故また
 とひ花を猪之月を妬む
 美姿あつてもいづつま
 地下の塵まのうづもれ
 て漢雲の交りをゆる
 さねこれなうて記録
 どもの中も試さく載
 たることんあさうぶ志
 ういあれどかきもこれな
 もと同類めて倭名鈔
 不之盗のたぐひもたまに
 賤者なることいせんも更
 なりかて今の柱女塵



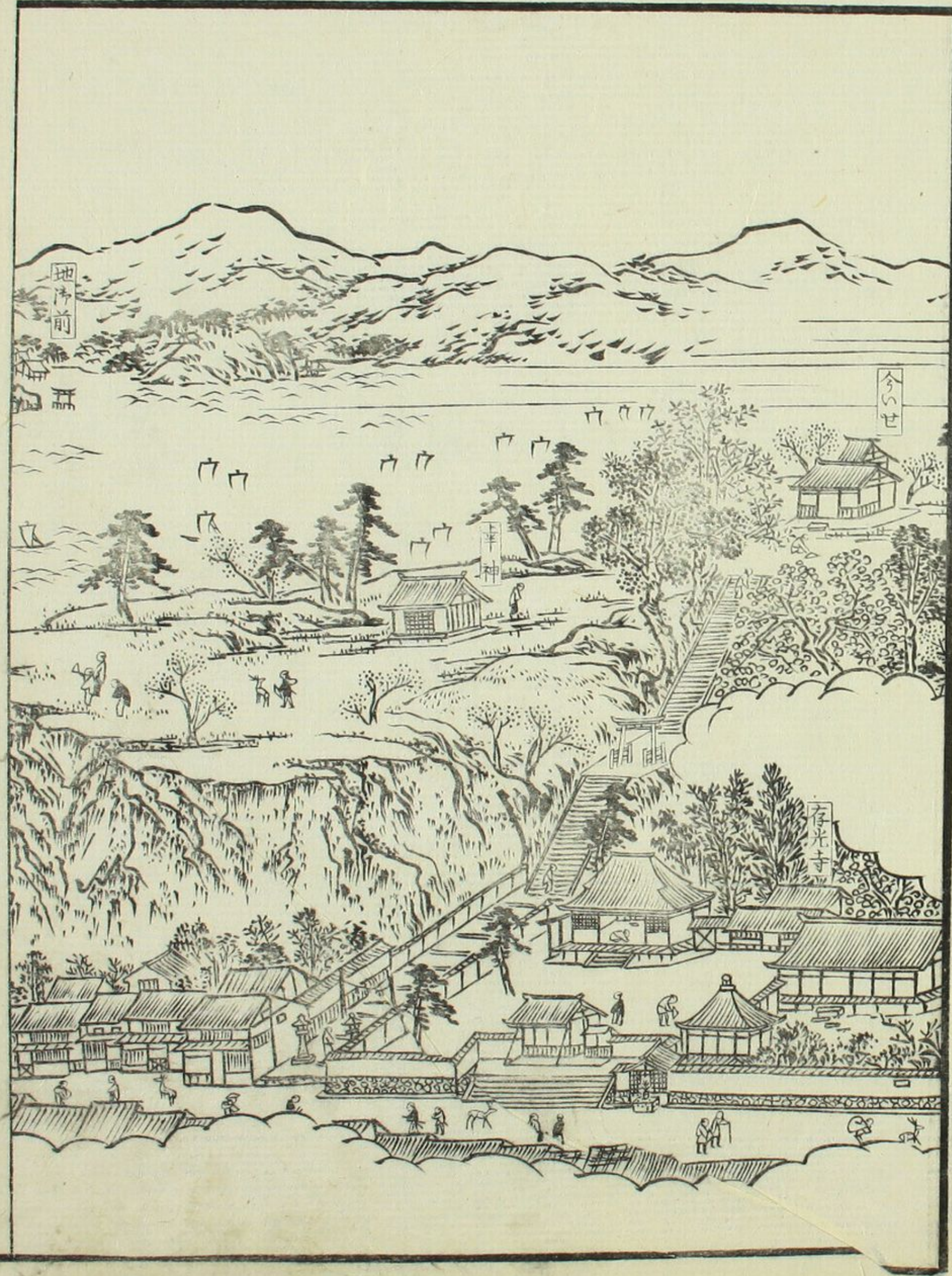
存後
 楊園也

こ
 子いもとより貴人の前ふ
 出ること能はた市井
 のか手のもてあまむも
 めまればいと昔よりも
 たよりたんと一日たり
 い思はるべきもなかり
 既子昇平二百年奢
 侈きまねる世の中
 なれはま屋のか菊
 びま乱れ小田屋のまろ
 へは唇をかきうて紫衣紅
 裳のうけはきいあら江はの
 全盛も所を譲ん容貌
 一度らうみ深る者たれを
 偏はらんあまうてもけし廓は久
 く足をとらむることなれ



この良將の武運天のなほ長久より讐敵大内家の者ども
ちまぢ討亡したまへと社人の神前於て神樂鼓鈴の
小祝の詞を盡し供僧の弥山小登りて護摩の烟小丹心乃
こと成願りて求聞持をぞねちひる實や誠の天の道神明
感應の理のや有らんねちよき六月をわたりて敵の船大野口
へ来り勢嚴島に在合せざる警固船浦兵部丞飯田七郎右
衛門等を先として思ひよるるをりなれを敵船をこりり来
たりたき船漕せせ碇引上げよと囁ききけり尋常の兵どもな
りせを唯今の有格にて假令取合せ馳向ふとも忽利を失ふ
魚くりに何れも水戦の馴たる勇士なれを渾父いまで鉤を
抛さきど舟金鱗波をよせ来ると喜びいさんて漕向ひ散り
小攻戦ふところに敵も終りに三艘来て来ぬるとの死生不知

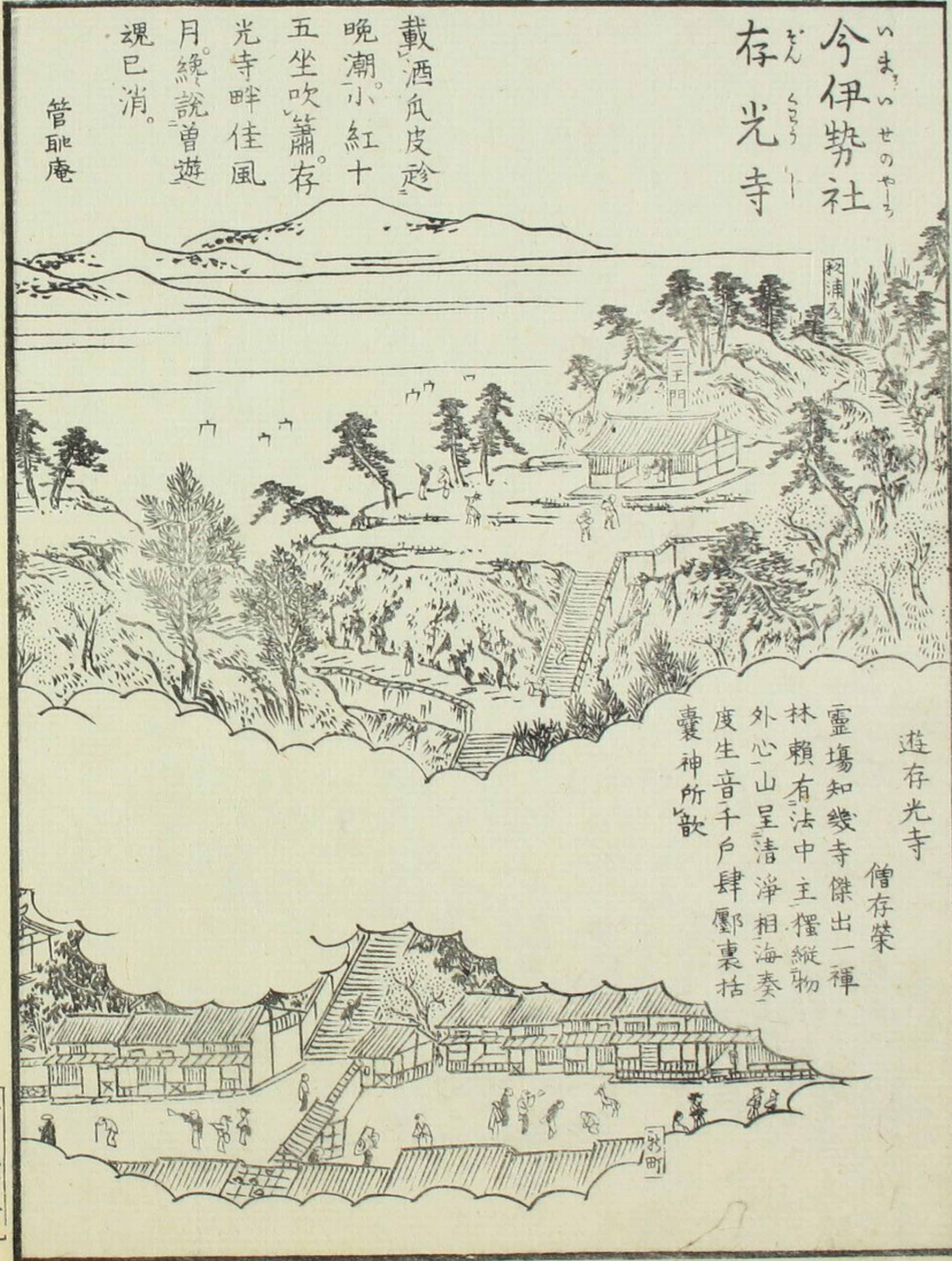
の勇率なれし身命を惜まば防戦を止まると母弟方これを
ともせ次飯田七郎右衛門敵の宗佐の兵素系掃部丞を討と
りれを敵大舟機を失ひ何処ともなく逃行りり元就去年
左衛門當島より湯久米巻敷捧け来りしに依り合戦利を
得たり今ま當島小城を築てをわたりて敵来り素系以
下を討得たること是疑ふところもなき當島の明神敵小打
勝吉瑞を示したまへたりとよろこび即ち頸ども城のふも
とにかけなすりかくて城の地尾續の方を人丈夫人のちか
らを合せて深く堀り切り城郭要害の利軍法の秘術をつく
はまらるるに餘り同様の浅沼なる小城小地地利あり堅
固なる次行を小掛て抛ると母たやをわたりて根よきゆきども



今伊勢社
存光寺

戴酒瓜皮趁
晚潮小紅十
五坐吹蕭存
光寺畔佳風
月繞說曾遊
魂已消。

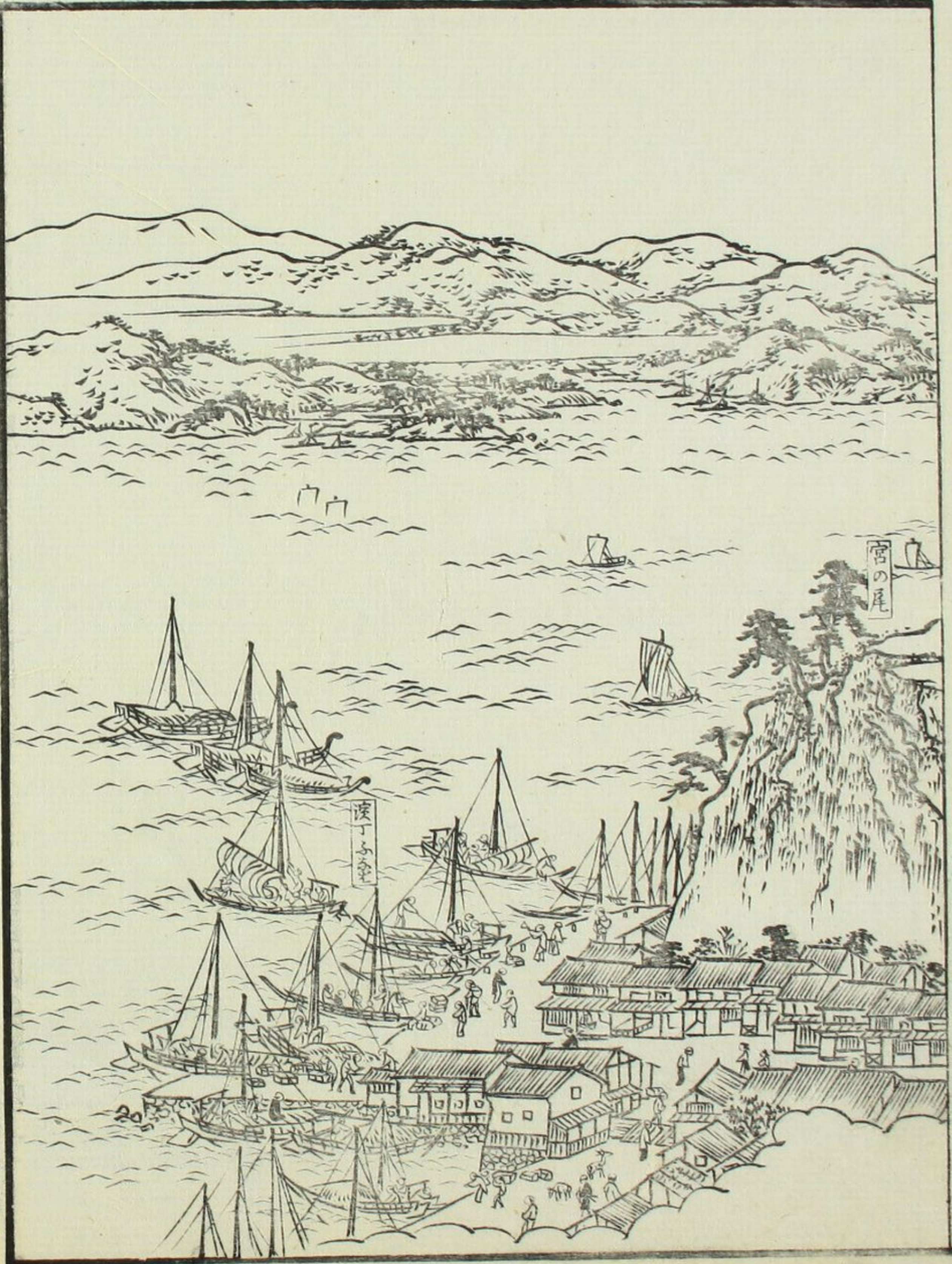
管耶庵



遊存光寺

僧存榮

靈場知幾寺傑出一禪
林賴有法中主獨縱物
外心山呈清淨相海奏
度生音千戶肆鄧裏拈
囊神所歆



敵ちうく攻寄る時ハ壁立萬仞ノ碧海ふもと城繞りしを容易に扱
つゝ船き板ぞなかりける普請功積りて成就せしは已斐豊後守
同五郎兵衛新里掃部外を大将とて垣田伊友兵衛吉川元
春の手孔者佐伯源左衛門樋口彦兵衛福原左近将監が郎等福
原刑部を捕等城先とて究竟の兵三百余人と籠らる壘
たらく溝深き此をらはまた勇将猛率なれを防忍勢何百義
小て攻るとも輒く落べしといふえさうけり

今伊勢神社

要害の真小町拜殿を居
瑞垣あり例祭十一月廿日

毛利家より米二十五石を附くれば毎年湯立の神事を
行ふこれ

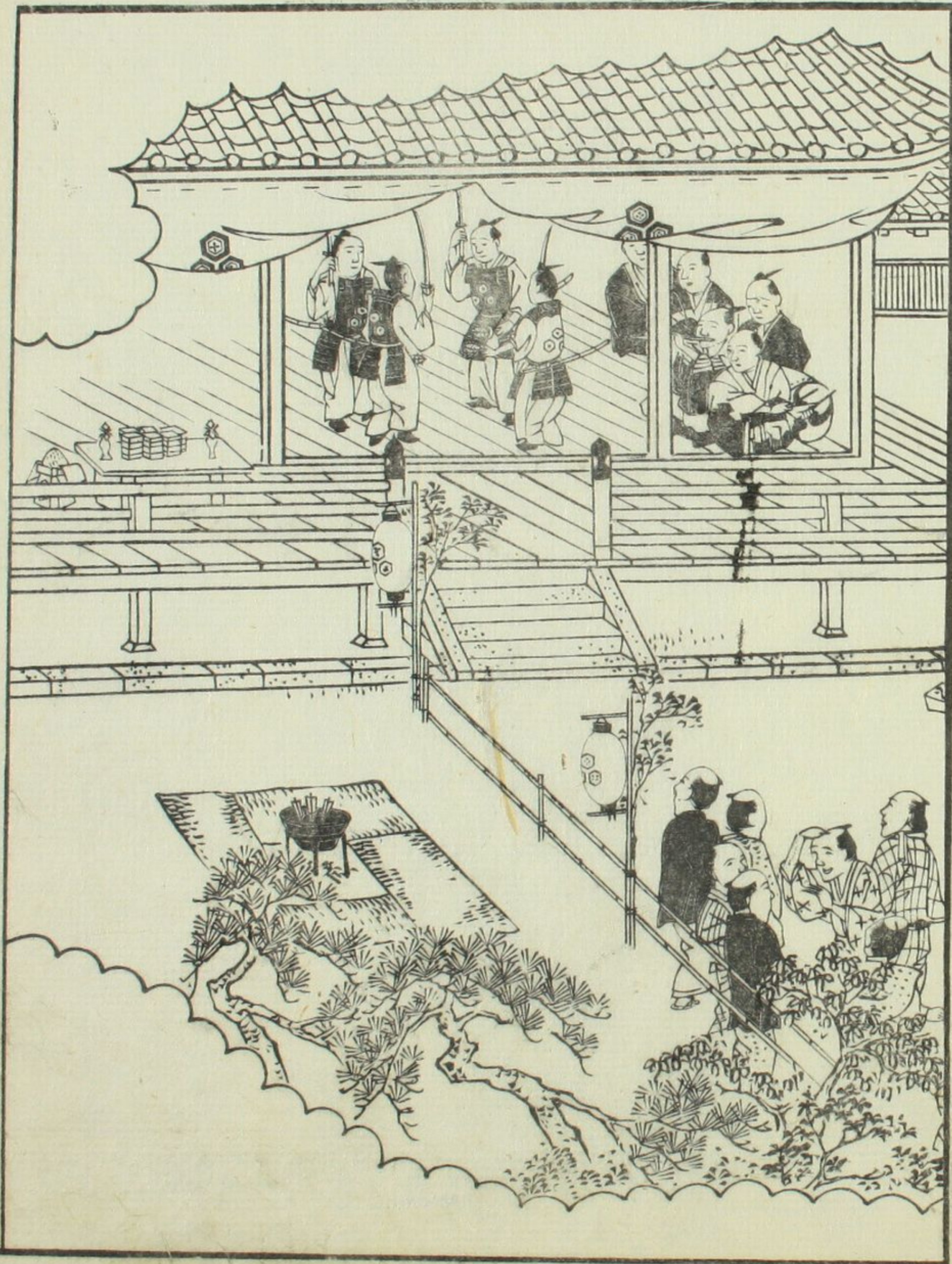
陶金姜の霊をいづるれんがなるありとぞ

休堂

長浜小浦へこゆる山路小町り貧賤の縁人の
一宿のあり設けたり

二王門

同小町り往昔本宮の二王門ありといふと其證なり
延宝六年うらび創立此の辺も榎樹あり



毎歳十月朔日今伊勢
 御湯立の神事ハ
 存光寺古内ニ
 於てあれ哉
 行ふなり



宮尾の城合戦



宮尾の城ハ今の存光寺
 今伊勢の所なりとをその
 郭内ハ即今の地勢を以
 考ふる時ハいづよも淺間な
 る若墨をまへともおも
 へられども諸軍記よるよ
 經營時月を費し趣に
 も見え且陶氏大軍を
 以て攻寄せしとを
 彼此と思ハ魏然たる
 一城郭なるべし
 看官今時の形
 勢を以画面を
 議すること
 なれ



こ
うら
小浦



二ノ五十五

小浦 こら 漢家なり寛政のころかといふ浦小といふ孝女ありけるが五歳の時より父母

池浦 いけのうら 浦小にちのりけり花本あり

蛭子社 むし 小浦に

角佛堂 かくぶつどう 小浦のほみあり役小

揺岩 ゆいがん 長溪まち仁王のまゆあり

西行返 さいぎやうげん 二王より長溪へかよひ路角仏のちのり池の浦の山路をりむり西行法師はみふて

へもそへさうけりこれをききて姫ちるもききてもおけのかうらとこそよむはれ既にもぬけのかうなれ
へたまりいへちるかゆきといひ西行茶あまき言葉なくしてうぬよりてけきをかくちつけ
しとや○葉小香川氏の秋長夜旅まけり西行撰集抄にもえ候本朝語園よるに西行奥
及松高は藤七日和まりに名所二百まかりもめり興つたこれよりちりかき名所のちど
ちると里人小岡ふいま十日まかりみして見盡さるるといふ西行退庵にて是よりちり其処を西行
席といふといひけり附合せよとよきと今やとち久く島よるちりたせりといふ

